

# 東北の大黒信仰儀礼の基礎的研究

## —文献史料や統計データを活用した民俗的試論—

菊地 和博

本稿は東北地方から新潟県の北部に広がる大黒信仰儀礼について論じたものである。その内容について、1つは各県単位で実態や現況を整理して分析・検討を行い、その特徴と儀礼構造を明らかにした。2つは日本の他地方との比較から東北固有の儀礼ということが認められ、かつ、いくつかの「東北的変容」が行われたと考えた。3つは東北の大黒信仰儀礼の広まる時期について、史・資料と時代的情況を踏まえれば明治以降ではないかとの見解を述べた。4つは儀礼の要因・歴史的背景にあるものとして「東北と大豆」という説を提示した。そのほかに、この説を補うものとして東北各県の「庭田植」の予祝儀礼における大豆の存在を取りあげた。以上のことを論ずるための手法として、各県の蓄積された地域資料と文献史料や統計データを収集・活用することを試みた。

本論の要点は多くあるが2つのみ述べてみる。1つは江戸後期『奥州秋田風俗問状答』にみられる「大黒天祭り」に関連することである。現在の東北大黒信仰儀礼の始まりと原型はこの『問状答』にうかがうことができ、大変貴重な文献史料とみた。「大黒天祭り」は三都の「甲子祭」や古くは「甲子待」につながる祭り儀礼と捉えられるが、現在の東北の大黒信仰儀礼の多くは、厳しい農村事情を踏まえれば明治時代に入ってから広くおこなわれたのではないかとの考えに至った。東北の場合イエ単位の信仰や12月9日の実施、唱えごとや豆料理など儀礼の民俗的豊かさなど、関東や西日本の大黒信仰にはみられない特徴をもっており、それは「東北的変容」ではないかと述べた。もう1つの要点は「東北と大豆」である。この信仰儀礼は大豆生産量の多さと農民の切実な豊作祈願と感謝が基盤としてあるのではないかとの仮説を立てて考察を行った。しかし結論づけるには論拠がいささか不十分である。ゆえに本稿の内容は基礎的研究の段階であり試論としたい。

### はじめに

平成30年（2018）2月に伝承文化支援研究センター主催の「大黒さまシンポジウム」が行われた。筆者はそのときの内容をもとに『村山民俗学会』（第32号）に「東北地方の大黒さま行事・習俗を考える」と題する文を投稿した。それは調査報告書のようなものであったが、そのなかの「考察」は実態の整理や現状把握などにとどまりじつに不十分なものであった。そのときのやり残し感もあり、もっと論文としてふさわし

い内容に近づきたいとの願いから本稿執筆に至った。

なお、大黒についての表記であるが、筆者は文中ですべて「大黒さま」と統一している。一方で、引用文献にみられる「大黒様」「大黒天」などの表記は、あえて修正せずそのまま掲載していることを断っておく。

## 第1章 大黒信仰研究史について

大黒信仰の研究について、よりまとまっているのは『民衆宗教史叢書第29巻 大黒信仰』である（注1）。本稿では、まず大黒信仰の研究経緯という観点から大島建彦の「大黒信仰研究の成果と課題」を引用してみる（注2）。それによれば、日本の大黒を含む福の神の研究は、日本史学上で喜田貞吉と長沼賢海の両氏を中心に進められてきた経緯がある。喜田貞吉の研究は、大正7年（1918）『歴史地理』31巻1号「日本大黒信仰考」から始まる連載がある。長沼賢海の場合は、大正5年（1916）『史学雑誌』27巻1号「大黒神考」を始まりとするいくつかの論考がみられる。それらの両氏の研究を通して、インド・中国・日本の大黒信仰がどのような変遷を辿ったかを知ることができる。

喜田・長沼両氏のインド・中国・日本にわたる大黒神の研究では、そもそも大黒神はインドの三面六臂の憤怒相をもった恐ろしい戦闘の神であった。それが中国に入ってから、食堂を守護する神に変容していく。その後、日本では最初は大台宗において比叡山に大黒天が食堂に祀られ、それがやがて各寺院に食堂の神として広く伝えられていく過程がある。

大黒信仰が民間にまで広まるのは、日本神話に登場する大国主命と習合することによってであると考えられている。その結果、大黒神が大きな布袋を肩にした姿が造形されるようになるが、それは室町時代に入ってから想像されたのだという。喜田貞吉によれば、さらに室町中期になってから同じ福の神のエビスとともに一対の神として祀られていく。そして、江戸時代の初期にかけて大黒とエビスを中心にいわゆる七福神が形成されたという。

江戸時代の天保8年（1837）から約30年間にわたって喜多川守貞が著した『守貞謄稿』には、「毎月 甲子日ハ大黒天ヲ祭ル 三都トモ 二股大根ヲ供ス（以下略）」と記されている（注3）。毎月甲子の日に江戸・京都・大坂の三都では大黒さまに二股大根を供物として捧げて祭りを行うことは共通だったようである。これらは本稿が主題とする12月9日の大黒信仰儀礼そのものではないが、「二股大根」を供物としていことが注目される。大根は東北地方の大黒信仰に伴う供物として必ず登場する作物だからである。

大黒信仰に二股大根が伴うことについては、江戸の事例として天保9年（1838）齋藤月岑著の『東都歳時記』にも「甲子日」「今日俗家にも此神を祭り、二また大根・小豆飯・黒豆等を供す」と記されている（注4）。そのほか豆類が供えられることも注目しなければならない。二股大根について、宮田登は「江戸のような都市でも、やはり大黒への供物に二股大根が使われていた。明らかに性的要素を持つものである」と述べている（注5）。それは大黒さまへ女性を添えることを暗示するものである。一方では、宮田は「この二股大根は、豊穡のシンボルとして、農村部の収穫祭の神供

に用いられるもの」として違った内容のことも同時に記している（注6）。しかし、東北の農村部でも都市部における性的要素と同じ意味合いがみられ、豊穡のシンボルだけではないことはのちに詳細に記す。

宮城県の調査をもとに論考を著した杉山晃一は、大黒神の依代兼供物が大根以外に14か所で豆類が供えられることから、この日は「豆の収穫祭」という側面が考えられるとともに、大黒は畑作物の守護神としての性格をもっているのではないかと推測している。また大黒に向かって「良いことをきき、悪いことをきくな」などと唱える際に、豆を入れた梔を神前で振り動かして音をたてたり、「耳あけろ」と大声で叫ぶのは、この神が耳が遠い不具性を備えていることを暗示しているのではないかと述べている（注7）。

杉山晃一と同じく大黒神が畑作物の神として捉えられるとするのは、小野重朗「大黒様」の論考にみられる（注8）。小野は南九州地域の調査を踏まえ、大隅北部の曾於郡志布志町一帯では、家ごとに大黒を畑作物の神として旧暦11月初子の日に大黒祭りを行っている事例を示している。小野はこの南九州での行事が北九州の福岡県と佐賀県の北部、筑紫山地を中心に広くみられ、その期日もまったく同じであることを指摘している。

また、「大黒に大根を供え飾る事例が圏をなしてあることも畑作物の神であることを裏付けているだろう」と述べ、正月に畑作物の代表的作物である二股大根を掛けたり吊るしたりして大黒に供えるのは、大隅半島の全域から曾於郡までの大隅のほぼ全体に及ぶとしている。

以上、これらの先行研究を踏まえながら東北における大黒信仰儀礼をみていきたい。柳田國男監修『総合日本語彙』には、「大黒様の年夜。12月9日に大黒様を祀る風習は広く東北地方に行渡っている」「ダイコクサマノメムカエ。東北地方に広く行われる12月9日の晩の祭である。命迎えと書いている所もあるが、妻迎えの意である」と記している（注9）。また、野本寛一編『日本の心を伝える年中行事事典』にも「東北地方では大黒様の信仰が盛んです」とある（注10）。いずれも大黒信仰が広範囲にわたり盛んであると記しているが、本稿ではこのことについて事例を踏まえて確認したうえで各論を進めていくことにする。



写真1 羽黒山伏の「松の勧進」で配布される大黒さまのお札  
（出羽三山神社発行・春山進氏提供）

## 第2章 大黒信仰儀礼の実態

東北の各地では、主に12月9日（地域によっては10日）に、各家々において大黒に対して豆料理や二股大根を供物として捧げて、いろいろな唱えごとを述べながら祈願・信仰の心を表現してきた。以下に、東北および新潟県においてどのような信仰儀礼が行われてきたのか、その事例を县市町村単位でみていきたい。

筆者は、先に述べたように『村山民俗』に大黒信仰儀礼の文章を投稿している（注11）。本稿では重複を避けるために執筆後に新たに知り得たものについてのみ記すことにする。なお、『村山民俗』に掲載した事例は、青森県3件、岩手県3件、秋田県4件、宮城県2件、山形県13件、福島県3件、新潟県1件であった。

### 1. 青森県

#### (1)南部地方全般

12月9日 大黒さまに豆料理とマッカ大根を供える風習が県内各地にある。しかも豆料理やマッカ大根を供える由来についても各地に話が伝わっている。佐井では豆料理は48種作って上げると果報が授かるといわれているが、47種まではどうにか作れるが残り1つはなかなか作れないという。五戸町ではその1つが手豆であるといっている。豆汁・小豆粥か豆飯・豆シトギ・オダイコク豆腐などすべて豆料理である（注12）。

#### (2)下北半島佐井村磯谷地区

12月9日 豆シトギ。神様の耳が聞こえないといってマッカツイテル（二股の）大根で神棚を叩く（注13）。

#### (3)三戸郡田子町明土平地区

12月9日 大黒様は耳が聞こえないといって、お膳の縁をたたいて拝んだ。大根に山からとってきたハシギで作った箸を刺して槌にした（注14）。

#### (4)三戸郡名川町剣吉地区

12月9日 豆シトギを作る。48種の豆料理を作るともいう（注15）。

#### (5)上北郡天間林村付田地区

12月9日 大黒様に豆シトギとお神酒、飯を供えた（注16）。

#### (6)三沢市岡三沢地区

12月9日 大黒様に二股大根、オシトギ2個、お神酒を供えた（注17）。

### 2. 秋田県

#### (1)県全般

大黒天の年越し。恵比須さまとともに福神として祭られ、その年越しは12月9日である。黒豆を加えた大豆飯を炊き、料理は豆料理を主とする（これを大黒さまの豆つなぎという）。それにお神酒と二股大根を添えて供える。飯は枡に盛ることもあり、料理は恵比須皿を用いている（注18）。

#### (2)男鹿半島

①わら皿に小豆飯を盛り、二股大根を添えてあげる（注19）。

②南秋田郡琴浜村鳥居長根地区（現男鹿市）では、12月9日「お大黒」。藁にて42枚作り（エビス皿という）鱒（ハタハタ）と生酢と豆飯を供え、2月9日に大黒皿を流す（注20）。



(3)平鹿郡

①むかし大黒様が餅振舞の帰りに胸が焼けて困り、川で大根を洗う女が大根を所望すると、これは主人の物だからあげられぬが、こうすれば数は減らぬからと、二股大根の片方を折ってくれたという話が伝えられている（注21）。

②平鹿郡山内村南郷地区では、12月9日大黒様。豆料理を供える。縁結びの神様としている。当日夜遅くまで働く。女は裁縫、男は縄緇（なわない）や履き物作りなど（注22）。

3. 岩手県

(1)胆沢郡

12月10日を「お年重ね」という（注23）。

(2)一関市

舞草地区では、2月10日はダイコクノトシトリ（大黒の年取り）で、股のある大根2本をあげ、柀に煎豆を入れ、揺りながら「御大黒様耳あけろ」と唱え、自分の年の数だけ大豆をつかめば吉という（注24）。

(3)水沢市

「大黒さんの女（め）迎けあの日」とし、豆をいり、晩その豆を銭および鍵といっしょに大きな柀に入れ、「キンカ（響）大黒耳あけろ」と唱えて振ってから神棚の前の卓上に供えた。マッカダイコン（ふたまた大根）も供えた。そして「夜豆け（食）ばいい」といって豆を食べた。柀に手を入れて自分の年の数だけつかめば幸運がくるといわれていた（注25）。

(4)東磐井郡

この日（12月9日—筆者注）をダイコンノトシトリといっているのだから（大原町）、大根と大黒との関係は深いのである（注26）。

(5)江刺郡

10日がダイコクサマノヨメトリ（注27）。

(6)九戸地方

「大黒様の年とり」で豆料理に二股大根を添えて供えるのは一般的である。特に九戸地方では「9日お大黒」と称して9日に行く（注28）。

(7)気仙住田町

お膳には御飯と田楽・炒豆を五升柀に入れ、二股大根と普通の大根を添えて供える。特殊なものとして遠野地方では更に俵団子を供えるが、これは米の粉で俵のように形作り中に今は砂糖であるが塩味の粒小豆を入れたものである。豆料理の炊事を主とするが、48種の内、手豆足豆の2種が不足で46種しかできず、大黒様から、夢でお告げがあったという諺がある。豆製品48種をお供えすると果報があたる。自分の年の位豆を握れば果報があたる（上閉伊・和賀・胆沢・岩手、其他）（注29）。

(8)大船渡市

蛸の浦では大黒の年取りは10日に行く。婿大根と嫁大根（二股大根）とを供え、豆と米を煎って柀に入れ、神棚の前で「おん大黒さま おん大黒さま よい耳聞かせてけらっせん」と3回唱え、それを家内中で分けて食べる（注30）。

(9)釜石市栗林町上栗林

12月10日大黒様の年取り。豆腐田楽2つと大根2本を供える。大根の1本はマタガリ大根（二股大根）である。大国主命が餅をご馳走になり苦しんでいると、ある婆さ

んが気の毒に思いマタガリ大根をくれ、それを食べて助かったということから、マタガリ大根を供えるのである。煎り豆を一升枥に入れて供え、「お大黒様にあげます。お恵比寿様にあげます」と何回も唱える。大黒様は耳が聞こえにくいから大声で唱える。この日は手豆・足豆も含めて48種類の豆料理を作る（注31）。

#### 4. 宮城県

(1)12月9日または10日をダイコクサマノメムカエ（大黒さまの嫁むかえ）といって、二股大根をヨメダイコン（嫁御大根）、通常のをムコダイコンといい、大黒さまに供える。また豆煎りなどを添える。その煎り豆を枥に入れて振りながら「大黒大黒、耳あげ、おかた持ったの知らねえか」「耳あげで良いこと聞くよう悪いごど聞かえよう」「よく耳あけて聞かんせ、この豆の数、米と俵、銭金取らせて」などと唱える（注32）。

(2)12月9日または10日を「大黒さまの嫁迎え（めむかえ）」といい、股大根を「嫁御（よめご）大根」、普通の大根を「婿大根」といい、その一対か股大根だけを、種々の豆料理とともに大黒さまに供える。このときに煎った豆を枥に入れて振りながら、次のように唱える。

お大黒さん お大黒さん よく耳あけて聞かんせ この豆の数 米と俵 銭金取らせて下さい

（気仙沼市鹿折）

大黒さん 大黒さん 耳あげで よいこと聞くように 悪いこと聞かないように  
（金成町長根）

大黒 大黒 耳あげ お方持ったの 知んか 知んか（松島町高城）

この日について、次のような昔話が県下に広く語られている。昔、大黒さまが、餅を食べ過ぎて腹痛をおこした。川で下女が大根を洗っているのので、その1本を所望すると、これは主人に数えて渡されているのどと、股大根の片方を折って差し上げた。大黒さまはそれを食べて腹痛が治った。それで餅を食べるときは必ず大根を食べるのだ。この行事は稲が初の状態にある時期の行事であり、股大根は人型であり、田の神の婚姻を象徴するもので、穀霊の増殖を促し、来る年の豊作を願う、性的な祭事の古習を伝えている（注33）。

(3)仙台市泉区福岡蒜但木

12月9日「大黒様の妻迎え」。この日は大黒様に二股大根を供える。夜には一升枥に煎った大豆を入れてザクザクと振りながら、「大黒さん 大黒さん いい耳 聞かえん」と唱える（注34）。

(4)栗原郡

「大黒の芽迎え」は10日の夕方、白飯を炊いて豆粉を振りかけて食べ、二股大根を供え、一升枥に炒り豆を入れ、「大黒大黒耳をあげ、よい事を聞いて悪い事を聞き給うな」と唱えて振り鳴らす（注35）。

(5)宮城郡

①二股大根を供え、豆炒の枥に入れて振りながら「お大黒様 お大黒様耳をあけていますから よい耳を聴かせて下さい」と3度唱える（郡誌）。或いは炒豆の外に豆飯、豆汁、豆膾など、48種の豆料理を供えるのが本式だといひ、またダイコクサマノカカサンと称して、必ず二股になった大根を上げるといふ者もある（注36）。

②豆炒りを枥に入れて振りながら「お大黒さまお大黒さま、耳をあけていますから、

よい事をきかせて下さい」と3度唱える。大黒さまはつんぼの神様だという伝承が各地にあって、それで祈願するのに大きな声で耳をあけて下さいといったのが、人間の方が耳をあけて待つような唱え言に変わったものである（注37）。

## 5. 山形県

### [村山地方]

#### (1)山形市山寺地区

耳あけ・大黒祭、12月9日に柀に炒った豆（一緒に銭を入れる場合も）を入れ、ふたをして上下に振りながら「お大黒様 お大黒様 今年もいい耳聞こえましたが、来年もいい耳聞かせてください」と3回繰り返して言う（注38）。

#### (2)山辺町中村・作谷沢地区

旧12月9日大黒様に尾頭付きの魚（鮒や秋刀魚）と「まった大根（二股大根）」を供える。一升柀に炒豆と家族の人数分だけのお賽銭の硬貨（1円玉とか10円玉等）をいれて用意する。大黒様の前で「お大黒様 おえべっす（恵比寿）様 耳を開けて進ぜます。どうか来年も良い耳きかせてください」と唱えてお願いする。終わると炒豆は家族で分け合って食べた。中に入っている硬貨は唱えた人が全部使いのが習わしであった（注39）。

#### (3)東根市

①耳あけ、お大黒様の年越日（12月9日）に実施。来る年の豊作祈願と耳がよく聞こえるように祈る（福耳願望）。供え物はその日の食材に活用する。柀の中にお金や豆を入れザラザラと音を立てて「お大黒様 お大黒様 今年より来年 いい耳聞かせてけらっしゃい。まったん大根に豆あがれ」と大声で話し掛ける。酒・とうふ・豆・大根を神棚に直接あげる（注40）。

②耳あけ、長瀬・小田島・大富地区。9日夜、大黒さまに二又の大根と炒豆を一升柀に入れて供える。炒豆のほかに小銭を入れるところもある。唱え言として一般的には柀をガシャガシャ振りながら「お大黒さま 今年よりは来年どうか良い耳きかせてけらっしゃい」と唱える。「聞かず大黒様 股大根でむね開けて豆あがれ 来年1年、作、たくさんできるように（小田島地区）」。唱え言は地域により、或いは戸毎によって多少異なる（注41）。

③神町地区。旧12月9日夜大黒柱の神棚に大黒様を安置したのに二股の大根を供えて一升柀に煎豆、小銭を入れ蓋をしてガチャガチャと振りながら、唱えごととして「お大黒様、お大黒様 今年より来年、どうか良い耳聞かせてけらっこや」、最後に「股たん大根で豆あがれ」と3回唱える（農家の主人が豊作を願って）。一方、一般庶民は「お大黒様、お大黒様 耳をあけなされ、来年はいつそう耳が聞こえるようにしてください」、最後に「股たん大根で豆あがれ」と唱える家もあった。年を取れば耳が遠くなる。何とか大黒様の大きな福耳にあやからんと願った。唱えは地域、戸毎（職業により）異なるが、実施家は、今は全戸で1割程度と考えられる（注42）。

#### (4)村山市大高根

旧12月9日大黒様の年越し（耳開け）。今年よりも来年は良いことを聞かせていただくよう恵比寿、大黒に祈る。葉付き二股大根を大黒様のお嫁さんにして供え、7種類の豆料理にして、ご飯、お汁、おかずすべてに豆を入れて供え、またみんなで食べる。夜には豆煎りを一升柀に入れて「大黒 大黒 聞かず大黒 耳あげて豆あからせ」と3回言う。米俵の霊として大黒の神の信仰である大黒様に二股大根を供え、一升柀

と豆煎りとお金（7銭）を入れ、動かしながら「大黒 大黒 股大根 今年もエエ耳聞かせてけらっしゃい」と願う。大国主命にかかわる故事として伝えられているが、股大根は子孫繁栄を意味するものである。二股大根をお供えするのは、大黒様は女性が大変好きな神様なので、女性と似ている二股大根をお供えすれば、喜んで願いを聞いてくれると信じられていたからだ。大黒様は、出来るだけ艶の良い、両方同じ太さの二股大根を喜んだといわれている。豆づくしを食べ、良い事があるよう健康延命、家内安全を願った行事である。一升枡に五合の豆を入れたのは「ますます（枡々）繁盛（半升）するように、ますます幸せになれますように」との意味があるという（注43）。

(5)寒河江市平塩地区

12月9日耳あけ。大黒さまの祭りでマッタ大根と豆煎りを供え「大黒さま 大黒さま 耳の穴を開けて進めますから 来年はよい耳を聞かせて下され」といって祈る。そのあいだ子どもたちは背後で、鉄瓶の蓋・皿・火箸・十能・灰ならしなどを持ってきて、楽器の代わりに鳴らし、終わってから豆煎りとお金を掴み取りする（注44）。

【置賜地方】

大黒様の耳明け。米沢市とその近辺で12月8日をこういう。この日は二股大根と黒豆の飯でお祭をする（民俗学2ノ3）。この神が聾だということも各地の伝承で、大きなこえで唱えごとをしたりする。この日をダイコクサマノゴシュウギともいう（注45）。

(1)米沢市付近

12月8日を大黒様の「耳明け（みみあけ）」という風がある。別に御祝儀ともいうから、メムカエと同じ行事である。茶の間の恵比須棚とともに祭ってある大黒様に、二股大根に柏の葉をあてがってわらで結わえたのを供える。お嫁に着物を着せる意味だという。大豆飯を供え、家内の者も食べた後で、炒り大豆を枡に入れて、それをがらがら振りながら、「お大黒さまお大黒さま、耳をあけておりますから、いいこと聞かせておくやい」と唱えつつ、神棚めがけて3度豆を投げる。家によっては枡を動かしながら「ぜにかね、ざっくもっく（沢山）はいるようにしておくやい」とも唱える（注46）。

(2)川西町

①吉島地区 耳あけ

神棚に大黒様の妻となる二股大根をあげ、「大黒様 大黒様 耳をあけていますから ええごと聞かせておごやえ」と唱え3度神棚に向け枡に入れた炒り豆をまく（注47）。

②西大塚地区 耳あけ

恵比寿・大黒・御田の神を祀る神棚に、二股大根・猫なます・お頭付き魚・酒・御飯を供え、耳あけの唱え言葉（お大黒様、お大黒様、耳をあけ申すから良いこと聞かせとごいや）を3回繰り返す。5升枡か1升枡から炒り豆を神棚に3回投げて終わる。俗説に大黒様は「つんぼ」とあるという説があり、耳が聞こえなければ良いことも聞こえず良いことも教えることができない。そこで耳あけという行事が生じたという。1年のうち良いことばかりではないので耳あけの行事はだいぶ残っている（注48）。

(3)白鷹町 耳あけ

高山・十王地区では各家庭で行われていたが、現在ではほとんどみられなくなった（二股大根・煎大豆）（注49）。



### 〔最上地方〕

#### (1)最上郡大蔵村

肘折地区では、マッカ大根を神棚にあげ、できるだけの料理を供える。昔は100品供えたというのが最近では47品供える。納豆は10品、豆腐は10品と数える。また好きな人は大黒の服装をして「明きの方から大黒が来ました」と唱え、舞って歩く。御祝儀を出す（注50）。

#### (2)最上郡鮭川村庭月地区

12月9日が大黒様の日で、黒豆を煎って枱に入れ、「大黒 大黒 聞かず大黒」と唱えながら供えた（注51）。

#### (3)最上郡向町地区

大黒様の年取りで、二股大根と赤ナマス（打豆を大根オロシのしぼり汁にて、それを大根オロシのかすに注ぎ、塩と酢を合わせる）、煮物（ササゲ豆を台として田作り、芋カラ、大根、牛蒡、里芋、油揚げなど7品）を作り供える。夜、豆を一升枱に入れ盆でフタをして、「大黒大黒聞かず大黒、耳開けでマメ聞げ」と唱えて振り、逆にしてそのまま大黒棚にあげ、7枚の皿にナマスを盛り七福神に供える。豆を達者のマメにかけた祝いである（注52）。



写真2 大黒信仰儀礼 2017年12月9日  
山形県大蔵村合海地区（袴着用の当主）



写真3 同 左  
山形県西置賜郡白鷹町 守谷英一氏提供

### 〔庄内地方〕

(1)12月9日を「大黒様の年夜（としや）」という。庄内地方では朝のうちから子供たちが「大黒様の豆腐を買って下さいや」といって売り歩く（注53）。

(2)12月9日が大黒様の年夜で、その日は朝のうちから少年たちが、大黒様の豆腐を買って下せいやといっって幾人も売りにきた。それを煩わしいと思う家では戸口に雪花

菜（きらず）を丸めておく。そうすれば家で豆腐は作っているということになって、豆腐売りは入って来なかった（風晝182）。これも豆腐によって12月8日との関係を想像せしめる。甲子の日を祀る習わしは他の地方にもあり、古くは子の月、すなわち11月の7日に、ネマツリとって大黒を祭ったこともある（運歩色葉集）。12月の上弦の日の祭を、大黒様にした根元はまだ明らかになっていない（注54）。

### (3)鶴岡市

12月9日大黒様のお年夜。二股（マッカ）大根・いり豆・ハタハタ・豆料理。大黒様は働くことの大好きな神様で、豆づくしの供物が主である。これはマメ（丈夫）で人達が働くことができるようにとの信心からである。神体はエビスと対に木造または金物の大黒様を床の間か神棚に安置する。その家によっては掛け軸もかける。なお、古いしきたりを守っている家では台所に祀っている（元来厨房の神）。昔、大黒様が餅を食べ過ぎ腹痛の折、親切な嫁から大根をもらって食べたら治ったという説話も伝えられている。そういうことからこの大根を大黒様の嫁とも呼んでいる。また山間部の集落の中には大黒様は耳が遠い神様なので一升枡に豆を入れてがらがらとならして「大黒様よいこと聞かせ、悪いことは聞かせんな」と唱えごとをする。地域差はほとんどなく共通の伝承行事があるのは珍しい（注55）。

### (4)酒田市

①生石地区では各家庭で大黒様にお膳をしつらえて、まっか大根・小豆飯・ハタハタの味噌田楽などを供えた（注56）。

②本楯地区では七福神の1つに数えられている大黒天は福德や財宝をもたらすめでたい神として知られている。12月9日が年夜にあたり、ご馳走をつくって神様にお供えする風習で、一般的に行われていることである。近海で水揚げされた頭付きのハタハタの田楽、マッカ大根を供える（注57）。

## 6. 福島県

### (1)会津地方

大黒さまの年とりは9日。エビスは15日のことが多い。菜飯や豆飯をつくる（注58）。

## 7. 新潟県

### (1)北蒲原郡

①二股大根のことを「嫁大根」などという。嫁大根を供える時には「嫁々」または「嫁やい嫁やい」と唱える。この日を大黒様のメムカエ・ヨメトリ・オカタムカエ・ゴシュウギなどという所が各地にある。焼き鮎2つ、ほしこ・炒り豆をエビスザラというわら皿にのせて供え、「耳あけて豆つまっしゃい」と3度唱えて豆をまく。懸鮎（かけふな）とって鮎を供えることは中部以東の夷講の祭に見られる風習である（注59）。

②9日の夜をダイコクサマノヨメトリとっている。この祭にはエビスザラという藁の皿に、焼き鮎2つとほしこ炒豆とを供えて「耳あけて豆つまっしゃい」と3度唱え、またその豆を撒く。二股大根をヨメダイコンともいう。これを神棚に上げて「嫁々」もしくは「嫁やい 嫁やい」と3度唱えるのも、人間の嫁迎の式を模したものであろう。そうして翌10日にはこの大根を煮て供えまた食べる（郷研1ノ2）（注60）。

### (2)東蒲原郡

①恵比須と大黒が同じ棚に同居しているところから、その両方の祭のように思っている

る所があり、12月9日を大黒様のおかた迎え、またはえべすの祝言という。二股大根を1本ずつ供え、夜になってから「恵比須大黒祝います」といって豆を投げつけることは山形県の米沢などと同じであるが、よいこと聞くようにとは言わない（注61）。

②9日を大黒様のおかた迎、またはエベスの祝言とも、ただ祝言ともいっている。恵比須・大黒に二股大根と普通のとを2本供え、暗くなってから「恵比須・大黒祝います」といって豆を投げつける。2神を共に祝う例は他ではまだ聞かぬが、ここでは恵比須様は毎年離縁なされるといい、婚礼にはかえってこの日を避けている（注62）。

#### (3)高石地区

9日を大黒さまの嫁どりといい、股大根と一本大根とを大黒さまに供え、あずき飯を食べる（注63）。

#### (4)上大谷地区

大黒さまの正月で銭さしを火に焚くと金持ちになるといって焚く（注64）。

### 第3章 大黒信仰に関わる全国状況比較

ここまで、東北・新潟方面の大黒信仰儀礼はじつに広域的で盛んに行われていることがわかった。それでは日本各地ではどうであるのかをみていきたい。

#### 1. 『日本の民俗』にみる

『日本の民俗』はかつての47都道府県ごとに47冊発行されており、同じ章立てで成り立っている。したがって全県ごとに「年中行事」の章があってその最後に「秋・冬の行事」の項目が記載されている。そこで大黒信仰儀礼についてはどう記載されているのかすべての都道府県に目を通してみた。その結果は、記載されている内容に多寡はあるものの、東北6県と新潟県のみの説明がみられた。それ以外の北海道から沖縄県には大黒信仰に関する儀礼をうかがわせる記載はまったくなかった（注65）。

#### 2. 『日本民俗地図』にみる

文化庁は昭和37年（1962）から3年度にわたって「年中行事」18項目にわたり全国調査をおこなっており、『日本民俗地図Ⅱ』としてまとめている。そのなかで、12月9日または10日の大黒信仰の儀礼・習俗にかかわる実施地域が明らかにされている。その地域が確認できるのは以下の通りである（注66）。

- ①青森県：調査地域34か所、うち実施地域14か所
- ②秋田県：調査地域30か所、うち実施地域13か所
- ③岩手県：調査地域30か所、うち実施地域22か所
- ④宮城県：調査地域30か所、うち実施地域7か所
- ⑤山形県：調査地域30か所、うち実施地域20か所
- ⑥福島県：調査地域30か所、うち実施地域4か所
- ⑦新潟県：調査地域44か所、うち実施地域8か所

上記以外の都道府県（沖縄は調査外）には12月の大黒信仰儀礼の実施地域はまったく見出せない。また、この年中行事調査結果は、付属資料として行事ごとに図形化して全国地図に落とし込んでいる。大黒信仰については、「神々などの年取り」のテーマで「大黒の年取り」「大黒の嫁迎え（メイムカエ・嫁御大根）」「大黒様の耳あけ」

を各県単位で表している。これをみても大黒信仰儀礼は北海道を除いた新潟県を含む北日本に同じ形と色の図形が集中して分布している状況が視覚的にも明確に把握できる。

### 3. 『日本民俗文化体系9 暦と祭事』にみる

田中宣一「年中行事の構造」の調査には、①福島県郡山市湖南町 ②神奈川県平塚市神田地区 ③長野県木曾郡樽川村川入地区 ④三重県熊野市荒坂地区 ⑤岡山県備中町旧湯野村 ⑥大分県南海部郡米水津村の全国6か所を選定して1月1日から12月31日までの「年中行事の構造」を一覧表にまとめている（注67）。それぞれ全国を大きく6つのエリアに分けて、そのなかから代表と考えられる地区を選定したものであろう。

そのなかでは12月9日（または10日）の欄に大黒信仰儀礼はどの地区にも記されていない。福島県では会津地方に大黒信仰がみられたが、中通り・浜通りにはみられなかった。上記郡山市に記載がなかったのは当然といえようか。

上記1～3の資料において大黒信仰儀礼を確認してみた。これまで指摘があったように、12月の儀礼は全国では東北地方を中心に限られたエリアでしか行われていないことが裏付けられたのではなかろうか。

さらに付言すれば、近畿大学教授で民俗学者の野本寛一氏の民俗学ゼミナールでは、毎年大阪、三重、奈良、京都、愛知、静岡などを調査して学生の手による詳細な「民俗誌」を作成してきている。しかし、いずれの地域にも大黒信仰の儀礼は見当たらなかったとの言も得ていることを記しておく（注68）。

## 第4章 大黒信仰儀礼の分析と特徴

### 1. ほぼ共通する内容

- (1)「お年夜」「年取り」の認識
- (2)豆を供える
  - ①炒った豆を枳に入れる
  - ②豆づくし料理をつくる
- (3)耳にかかわる伝承
  - ①大黒さまは「耳が遠い・耳が聞こえない」の言い伝え
  - ②大黒さまに「来年はよい耳聞かせて下さい」と唱える
- (4)大根を供える
- (5)豆・大根という畑作物の豊作と感謝

### 2. 全域にわたる信仰儀礼の特徴

- (1)東北と新潟県の広域にわたり、一升枳に煎り豆を入れて唱え言をし、大黒さまに豆料理と二股大根を供える儀礼がみられる。山形県・福島県・新潟県をのぞく地域で、豆料理は「48種類（品目）」にもものぼると伝えられているところがある。
- (2)大黒さまは耳が遠い・聞こえないとする伝承がある一方、山形県内陸部の村山地方と置賜地方は「耳あけ」の呼称で、大黒さまに「来年はいい耳聞かせて下さい」と祈願する事例がみられる。
- (3)山形県庄内地方では、大黒さまの「お年（歳）夜」（おとしや）の呼称が多くみられ、



豆づくし料理とともにハタハタの味噌田楽・豆なます・納豆汁など地域的特色のあるものが添えられる。

(4)福島県では主として会津地方に「大黒さまの年取り」がみられるが、他地域ではほぼみられない。

(5)12月9日（または10日）の信仰儀礼は、新潟県中部以北と福島県の会津地方から東北地方全体にかけて広く分布している状況がみられる。

### 3. 信仰儀礼における呼称

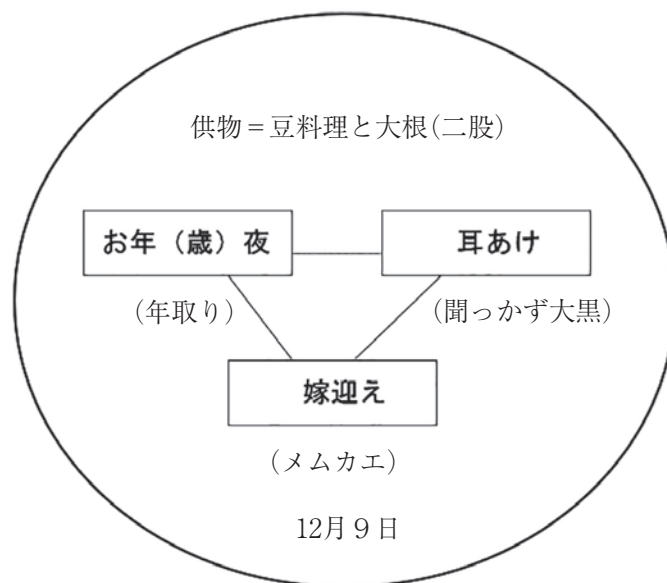


図1 東北の大黒信仰儀礼の呼称

#### (1) 「お年（歳）夜」「年取り」

人々は様々な神仏が12月に入ると1年を終える節目の日を迎えると考えたようである。地域やイエイエではそれぞれの「神祭り」を丁重におこなってきた。そのなかで、東北地方では大黒にとって12月9日（または10日）が大きな節目の日であり、まさに1年を終える日であるということが強く意識されている。そこで、この儀礼について「お年（歳）夜」「年取り」という呼称を用いる地域は県単位で記すと、青森県・秋田県・岩手県・山形県（庄内地方）・福島県（会津地方）が該当していることがわかり、宮城県と新潟県をのぞいて多数であるといえる。

のちにも記すが、山形県の東郷村・高崎村（現山形県東根市）では、奉公人や職人の弟子たちが新たな1年の雇用契約に調印するのがこの日であったことは、人々にとって新年を迎えるに等しい一日であったことを物語っている。

#### (2) 「嫁迎え」

「嫁迎え」以外にメムカエ・ヨメトリ・オカタ（お方）ムカエなどという地域もあり、この呼称は新潟県までも含んでいて広範囲である。この日に大黒に二股大根を供えるのは、この儀礼の実施地域すべてで行われているといっても過言ではない。この慣習は前述の『守貞謄稿』や『東都歳時記』をみても江戸時代までさかのぼることがわかる。宮田登は二股大根とは性的要素を持つものであり、それは大黒さまへ女性を添えることであると述べていた。杉山晃一は宮城県の調査地19か所が「嫁迎え」と称

し、多くが大黒さまに対する「嫁迎え」の行事であることを紹介していた。

以上のことを考え合わせれば、二股大根を供えるのは大根収穫への感謝という側面はありつつ、それ以上にやはり「二股」であることに重きがおかれた儀礼であると考えられる。何よりも、「嫁迎え」をはじめムカエ・ヨメトリ・オカタ（お方）ムカエの呼称の多さこそその本質を表している。

### (3) 「耳あけ」

「耳あけ」とは、山形県内陸部にみられる極めて限定的な呼称である。『山形県民俗地図』をみれば、山形県の内陸地方で北部最上地方をのぞく村山地方と置賜地方に「耳あけ」が圧倒的に多い（注69）。それに対して庄内地方のすべてと最上地方の一部では「お年（歳）夜」「お年越し」の呼称で共通しており、ほぼ県内が2分化されている。このことは大黒信仰にとどまらず、内陸・庄内における言語・食・祭礼行事・芸能などの民俗文化の相違のなかに位置付けて捉えることが可能である。本稿ではそこに言及することは本題とかけ離れることになるので別の機会に述べたい。

さて、「耳あけ」の呼称とともに注目されるのは、大黒信仰儀礼に関して「耳」にかかわる伝承が2つみられることである。それは、大黒は「耳が遠い」または「耳が聞こえない」とする場合と、「よい耳を聞かせて下さい」と大黒に何ごとかを願う場合と大きく2つがみられることである。このことは、煎り豆を一升枡に入れて振りながら大黒に向かって唱えごとをおこなう際にその違いが現れる。1つは「耳が聞こえないので大きな声や音を出す（青森県田子町）」とか、新潟県北蒲原郡では「耳あけて豆つまっしゃい」、「耳あけて豆あがれ（山形県最上郡大蔵村）」などと唱える。

他方、「よい耳を聞かせて下さい」と唱えるのは、「耳あけ」の呼称が多い山形県村山地方と置賜地方である。「今年よりも来年ええ耳を聞かせてけれ（山形県上市市小穴）」「来年はよい耳聞かせてけらっしゃい（山形県朝日町大沼）」「耳をあけていますから ええごと聞かせておごやえ（川西町吉島）」などである。

前者について、大黒は「耳が聞こえない」という認識が主である。大黒に向かって煎り豆を入れた一升枡を振ってガラガラと音を出すこと、大きな声を出して3度唱えごとをおこなうこと、これらの行為は大黒に対して大豆や大根の畑作物の豊作祈願を願う切実さをきちんと表現し伝えるためであり、人々が必死さを主張するための「方便」として、「大黒さまは耳が聞こえない」からという理由が代々伝えられてきたのかも知れない。

後者は「大黒さまは耳が聞こえない」ということは理由ではなくなっており、むしろ人々が大黒に「よい耳を聞かせて下さい」と切に願う言葉に変化している。これは最後の事例で川西町吉島の「耳をあけていますから ええごと聞かせておごやえ」という唱えことばのとおり、人間側が「いいことを聞くように」お願いするという意味ではなからうか。「いい耳」とは「良い出来事が耳に入る」というふうに捉えられる。このことを「耳塞ぎ餅」が全国的にみられる習俗として『村山民俗』にも引用して、「いい耳」事例に通底すると説明した。大黒への「いい耳を聞かせて下さい」とは、それを唱える農民・人々の豊作や幸福への願望の言葉として真剣なものではなかったろうか。なお、「耳が聞こえない」と「いい耳聞かせて下さい」の2通りに関しては、あらためて後段で述べたい。

## 4. 「48種類」の豆料理

東北および新潟県では、多少の差はあれ「豆づくし料理」が顕著である。多い地域

では「48種類」を作って供えるという伝承が残っており、これを県単位でみると青森県・秋田県・岩手県・宮城県にみられる。面白いことに「手豆」「足豆」を入れて48種類を作ればよいとも伝えられている地域もみられ、豆料理の多さを競うがごとく励んだこともうかがわせる。おそらく「48」という数字は相撲の48手に代表されるように多種多様性を表すものであり、質的に多いことの象徴的なものと思われる。のちにも記すが『奥州秋田風俗問状答』の「大黒天祭り」にも「48種」の大豆料理が供物としてあったことが記されており、江戸後期から伝えられていることがわかる。

山形県庄内地方では、現在も「豆づくし料理」といわれておよそ9種類が作られている。スーパーや個人商店などでは、「大黒さまの年夜」に必要な食材の売り出しがおこなわれており、その夜は地域経済を巻き込んで盛んである実態がある。豆料理48種類などと伝えられてきたことは、それだけ大豆栽培・収穫への農民のこだわりを示すものであり、実際に48種類かどうかは別にして、大黒神への供物として大量に「豆づくし料理」を捧げる行為が生まれたものと考えられる。



写真4 豆料理と二股大根（右下）

## 第5章「庭田植」（雪中田植）と豊作祈願

大豆が東北を中心とした他の儀礼でも重要視されている事例を以下にみていきたい。1月15日の小正月、東北地方を主として積雪の時期に「庭田植（雪中田植）」という行事が行われている。これは、雪におおわれた農家の敷地で田植えのしぐさ（模擬行為）をおこない五穀豊穡を祈願するものである。終われば「あき」の方（歳徳神がいる方角）を向いて手を合わせ「祝い 祝い 作の祝い」と声を出して祈願する（山形県東根市六田地区）。秋の豊作を期待してお祝の言葉を唱えて神に約束をしていただく切実な願いがこめられている。つまり、各地の庭田植は「予祝（よしゆく）」の儀礼であるといえる。このときに雪に植えられるのが稲藁であるが、注目されるのは稲藁とともにきまって豆殻が植えられる。本稿の主題に関連してこの行事に豆殻が登場することに注目したい。稲作とともに畑作である大豆の豊穡を心より期待する農民の心情がここに表れていると考えられる。

ところで庭田植は江戸時代中頃の東北ですでおこなわれていた。菅江真澄は「かすむこまがた」の1月15日の項に庭田植の様子について、「田うゝるとて門田の雪に、わらひしひしとさしわたし、また豆うゝるとて豆莖（ガラ）をさしぬ」と記していた（注70）。このことを記録したのは天明6年（1786）正月であり、仙台領胆沢郡徳岡（現岩手県胆沢郡胆沢村）での出来事である。真澄は稲藁豆と一緒に豆を植える所作として豆殻を雪にさしていることを見逃さず描写しているのである。

## 1. 青森県

### (1) 全般

庭田植え。小正月の晩、年取りの前に、女たちが11日に肥出しをしておいたところを田に見立てて田植えの真似をする。中志（六ヶ所村）ではこれをシズケとって、稲の幹を1坪、豆の幹と栗の幹を混ぜたものを1坪ぐらい雪に畝を作って畑のようにして植える（注71）。

### (2) 津軽半島

1月15日の年とりの日に、家の前の雪を鍬で掘り起こして田打ちのまねをし、イナカズの藁と普通の藁をまぜて苗に見立て、大株を刈るようにと1株で20本くらい束ねる。これを4列にして16株植える。夜の中に雪がかかると、翌朝に稲の花が咲いたとって喜ぶ。豆殻に藁をまぜて植えたり、植えたあと田の草取りから刈り入れまでの模擬作業もする（注72）。

## 2. 秋田県

(1) 鹿角郡十和田町毛馬内地区（現鹿角市）では、小正月1月15日に「田植え」と称して藁と豆がらを雪の上1間四方ぐらいの所にバラバラにさす（注73）。

### (2) 中仙町鶯野（現大仙市）

庭田植え。柴木のなかにひときわ目立つのは、暮れの大掃除に使った「ススハキボウ」。この場所は新しい年のよい方角をいう「あけの方角」である。雪の庭が田なら、苗はわら、それだけではなく、豆殻を野菜、柴木を果樹としてさし、それらの豊作もあわせ祈る（こうして田植えのさまを真似ることで、神さまが農家の人の豊作を願う気持ちをくみ取ってくれる、と考えているのです）（注74）。

## 3. 岩手県

(1) 豊作予祝の模擬行事の1つで、一般には15日の朝、苧ガラ・豆ガラ・新藁の3種を植えた。植えるといっても実は根雪に差すのである。このほか栗ガラ・稗ガラ・麦藁も植えたという部落もある（注75）。

### (2) 江刺市伊手地区

1月15日「モノマネ」と称して、「田植のモノマネ」と「豆畑のモノマネ」などの豊作祈願がある。「田植のモノマネ」は一家の主人が自分の田に藁で田植えのモノマネをする。「豆畑のモノマネ」では同じく畑に豆カラを差し植えるものである。これらは7株、5株、3株の順にしつらえ七五三と称したという（注76）。

### (3) 金ヶ崎町

1月15日の年取り。11日に肥を運んだ水田に、わら束・ごま殻・あわ殻・大豆殻等を雪に立てて田植えの真似ごとをする（注77）。



#### 4. 宮城県

##### (1) 仙台市青葉区上愛子

石垣家における小正月の庭田植え。1月14日に豆がら・麻がら・藁を束にして、屋敷内のアキの方（恵方）に七五三に並べてさす。春の田植えに似せて豊作を祈願する小正月の行事（注78）。

(2) 1月14日に年男が屋敷内のアキの方に、藁・豆殻・麻殻などを苗にみたてて雪の上に田植えをする。栗駒町文字では、植えた場所に竿を立て、縄を張ってカツヌキ（ぬるで）を削り掛けにした花と実を交互に下げる。宮城町赤生木では、近くにある果樹に木で作った臼と杵をかたどったものを下げる。七ヶ宿町湯ノ原では、その傍らに竿にアワノホといって棒を下げて立てる（注79）。

#### 5. 山形県

##### (1) 東根市

###### [その1]

六田地区。旧暦1月15日か16日、昼前、水田もしくは畑（家から最も近いところ）に行き、1坪くらいの雪の中に稲わらを数か所、豆からを数本たてる。鳥追い行事とセットでおこなった。つまり日中は雪中田植え、夜間は鳥追い行事だった（注80）。



写真5 「庭田植」東根市六田地区 2005年1月15日

###### [その2]

旧暦1月15日、早朝、農家の戸主が蓑笠をつけて明けの方（歳徳神のいる方向）、または前年の最初に雷の鳴った方に向かって雪の中に藁と豆殻を植える。旧暦1月14日の夜は観音寺地区で子供たちが拍子木を叩きながら「ホッラホーホ」と地区巡りをした（注81）。

##### (2) 尾花沢市

旧正月行事として1月11日の朝、堆肥を運んだ場所に藁・大豆がらなどを1株として25株を植える（一間四方の雪の上に植える）。夜明け前に田植えを終えると田の神に供え物をして今年の豊作を祈願する（注82）。

##### (3) 寒河江市

1月15日田植え。肥料（こい）を曳き、早朝既の肥料をクスキベラに載せ、男子2人で馬を曳く真似をして馬方節などを歌い、屋敷周辺の田植えをする空き地に行き、

肥料を撒き、素足になってアキ（歳徳神）の方に向き、一坪の場所に藁や豆殻を植える（平塩・中郷地区）（注83）。

(4)中山町

雪の田植え。宅地の片すみの雪の上に稲藁や豆殻などを約一坪くらいの面積に12株（閏年は13株）を植える。植える場所はなるべくアキの方（歳徳神のいる方角）にするので毎年違うのである（注84）。

(5)南陽市

1月15日、雪の水田上に藁と豆殻を用いて7株、5株、3株を南の方角を向いて植えた。翌16日朝、子供たちは「トリ追い」に行き焼いた餅をいただいた（注85）。

(6)米沢市

旧暦1月11日、稼ぎ初めと言って雪中田植を各戸で行った。その家の戸長が雪の上（聖雪になり雪渡りできる場所）に稲苗に見立てた苗（藁と豆の木と萱を束ねたもの）を約20束植える。装束はミノを着てほっかぶりして笠をかぶる（注86）。

(7)庄内地方

平田町（現酒田市）、藤島町・羽黒町・櫛引町（現鶴岡市）の調査地8地域で、雪中田植（さつき・雪の田植）が行われている（注87）。

## 6. 福島県

(1)サツキ。1月14日朝に家の前に藁苞を下げ、豆がらを雪の上に田植をするように挿す。この行事も雪の多い会津地方では各部落が行なっていてサツキ（五月・田植えのことである）といっている。15日の朝で正月さまを送ってからのところもある（注88）。

(2)会津地方耶麻郡熱塩加納村（現喜多方市）では、ワラや豆殻などを苗に見立てて植え、豊作を祈願する（注89）。

以上であるが、先に述べたように文化庁は『日本民俗地図Ⅱ』に「年中行事」を掲載している。そこでは「庭田植」は東北地方6県と新潟県（4地域）および富山県（2地域）にみられるのみである。「雪中田植」とも呼ばれるので、降雪地域に限定されるのはある意味当然かもしれない。しかし、大豆の豊作祈願の小正月予祝行事・儀礼として他地域には見出せないということを明確に把握しておく必要がある。

本稿では大黒信仰儀礼が行われるエリアと「庭田植（雪中田植）」実施エリアを重ね合わせて考えてみるのが一つのポイントであると捉えている。繰り返しになるが、この擬似田植の行為において、どの地域も藁とともに「豆殻」が決まって植えられることを見逃してはならないだろう。それだけ畑作の代表である大豆の生産と豊穰が農家の人々にとって大変重要であり、稲作とともに1年の始めにあたり「予祝」作物として神への祈りは切実だったと考えられる。

## 第6章 江戸時代からの大豆栽培

本稿では、大黒信仰儀礼は大豆の豊作祈願と畑作の神大黒への感謝を表しており、それは東北の大豆栽培の歴史性を背景にしているとの仮説に立ち、江戸時代までさかのぼって検討してみる必要があると考えている。それを根拠づけるには、江戸時代以

来の大豆の栽培・生産・消費に関する史・資料や統計データ等を踏まえて考証する必要がある。直接に論拠としうる適切な文献史料や統計データを見出すことはなかなか困難であるが、まず江戸時代の藩政における他国への農作物移出や大豆は年貢作物であったという観点から検討してみたい。歴史の一時期のデータとはいえ、東北地方における大豆生産状況の一端が理解できるものと思われる。



写真6 儀礼で使用される一升枧と大豆  
(イエによっては枧にお金を入れる場合もある)

#### 1. 江戸期の青森・岩手・仙台の大豆移出

諸富 大・遠藤匡俊による論文「北上川舟運による盛岡藩の江戸廻米輸送」には、「盛岡藩の北上川舟運による江戸廻米では、米と大豆がとくに重要な輸送品目であり、米は春と冬に輸送され、大豆は春にのみ輸送されていた」と記され、さらに「表2 盛岡藩の北上川舟運による輸送品目と蔵割」には、江戸時代後半の明和2年（1765）から安政、文久にわたる17年間の大豆移出量（単位：俵）が明らかにされている（注90）。次ページに示した「表1 盛岡藩の北上川舟運による輸送品目と大豆」は、その研究成果の一部を引用させていただいたものである。

年	為御登米	大豆	粳	小豆	餅米	石巻御用米	その他	蔵割
明和2(1765)年		1854						盛岡本御蔵
春	11251	322						郡山御蔵
	2642	365						花巻本御蔵
	5372	482						花巻新御蔵
	14235	477				80	御初尾米 2	黒沢尻御蔵
	2068							大迫御蔵
	3786							盛岡両御蔵
計	39354	3500				80	* 2	
文化13(1816)年	11000							花巻西御蔵
冬	11500							花巻南御蔵
	12500			6	30	15	御側為御登米1720	黒沢尻御蔵
計	35000			6	30	15	1720	
嘉永元(1848)年			150					盛岡新御蔵
冬	10000							花巻西御蔵
	10000							花巻南御蔵
	23000			7	60	30		黒沢尻御蔵
計	43000		150	7	60	30		
安政元(1854)年		1000						盛岡新御蔵
春		570	200					盛岡本御蔵
	4000	230						日詰御蔵
	12000	370						花巻西御蔵
	11000	380						花巻南御蔵
	13000	450					伊勢御初穂米 2	黒沢尻御蔵
計	40000	3000	200				2	
安政元(1854)年			150					盛岡本御蔵
冬	7000							花巻西御蔵
	7000							花巻南御蔵
	16000			7	60			黒沢尻御蔵
計	30000		150	7	60			
文久元(1861)年	4000							花巻西御蔵
冬	2500							花巻南御蔵
	18169							黒沢尻御蔵
計	24669							
文久2(1862)年		520						盛岡新御蔵
春		590						盛岡本御蔵
		310						日詰御蔵
	2000	480						花巻西御蔵
	2000	550						花巻南御蔵
	14500	350				50	伊勢御初穂米 2	黒沢尻御蔵
							別段為御登米 300	
計	18500	2800	200			50	302	

表1 盛岡藩の北上川舟運による輸送品目と大豆

一般に、盛岡藩は大豆生産を奨励して大豆特産地化を進めて年貢の増収をはかり、また藩の交易として江戸、大坂方面に盛んに移出して「南部大豆」としての銘柄を確立していったことが知られている。菊池勇夫の次の文はこのことをあらためて物語るものである（注91）。

盛岡藩・八戸藩の台地や山地の村々で、大豆がたくさん作られるようになったのはいつぐらいからだろうか。大豆はもともと領主にとっては馬糧としての畑作年貢の意味を持っていたが、八戸藩では17世紀後期になると、領主による公定値



段での大豆の買い上げが開始されており、江戸の商人も入り込んで江戸方面に売却されていたことが、藩日記からもうかがうことができる。藩の家臣たちも自分の知行地の大豆を領外にさかんに移出し始めている。隣接する盛岡藩領の奥通（岩手県北部・青森県東部）からも大豆が買い集められ、八戸領を經由して津出しされていた事例も知られる。（中略）盛岡藩奥通の大豆は17世紀後期にも陸奥湾沿いの野辺地から海峡を越えて松前に売られたり、前述のように八戸領を經由して江戸方面に売られていた。18世紀に入ると大坂市場とのパイプががぜん強くなった。

このように大坂市場に向けて集荷された南部大豆は、特に「大坂為御登（おんのぼせ）大豆」と呼ばれていたと記されている。一方、先に述べた岸本誠司によれば、南部藩にはかつて「御買上大豆」という言葉があった。「御買上大豆」とは、藩から強制的に作付けが割り当てられた大豆のことである。元禄・宝永（1688-1711）の頃、江戸・大坂などの大都市近郊の農村で養蚕や綿花栽培といった商品作物が普及するにすぎない、その肥料として、南部藩から大量の干鰯が江戸・大坂に運ばれるようになった。これによって、関東、関西と東北を結ぶ海船（千石船級）による流通が確立した。さらに、銚子、野田を中心に醤油生産が発達するようになると、都市および醤油生産地の大豆の需要を満たす供給源を南部藩に求めるようになったという（注92）。

一方、仙台藩の大豆について「文化頃（1804～1817）の留書（中目覚文書）に仙台藩の江戸廻米量は年によって多少の差はあるが、平年は米・大豆合わせて16万石から20万石前後であったとしている。時には30万石を超えることもあった」としている（注93）。仙台藩でも大豆生産は盛んであり「仙台味噌」の原料としても積極的に栽培され、大豆は「本石米（仙台米）」とともに石巻湊から江戸方面へ向けて大量に移出されていたことが知られている。仙台味噌は東日本の「赤味噌」の代表格として全国に知れわたっていく。

## 2. 江戸期の秋田・山形の大豆移出

秋田藩の大豆の移出について、敦賀の「打沓家記録」をみると、寛文7年（1667）ごろの敦賀着秋田荷として「米・大豆・小豆・そば・油草類、このほか杉木・蠟・漆・たばこ・土朱・干わらび」などの商品があげられている。これらが藩政初期にさかのぼる商品であったかどうかは明確でないが、当初から木材・金銀などとともに、米・大小豆などの農産物が領主的商品の主要なものとして移出されていたことはまちがいないようである（注94）。やはり大豆は藩領主により商品作物化されていたことがわかる。

次に出羽山形の大豆については、横山昭男の論考に大石田の商人である二藤部兵右衛門家が正徳元年（1711）から享保2年（1717）に酒田商人へ売却した荷物に関する文書が掲載されている（注95）。そこには、売り荷物として新庄米・最上大豆・小麦・荏草・たばこなどがみられ一覧表に詳細に記されている。これらは日本海海運を経て上方方面に運ばれている。本稿では一覧表の一部を以下に抜粋して紹介する（表2）。当時二藤部家は新庄藩の御用商人の役目をはたしていたという。なお、「最上大豆」とはおそらく村山地方産の大豆のことであり、単に「大豆」と記されているのは新庄藩領内の大豆のことではないかと推察する。

年次	商品量	代金
正徳元年(1711)	6月新庄米400俵	100両
	6月新庄米809俵	216両1分
2年	7月最上大豆140俵	27両1分
	8月新庄米25俵	7両3分
	大豆10俵	
4年	3月荏草121箇	84両余
	11月大豆241俵	100両
5年	7月大豆215俵	89両2分
享保2年(1717)	8月新庄米785俵	322両余
	最上大豆735俵	354両
	同小豆183俵	74両

表2 二藤部兵右衛門家文書

さらに山形周辺の農産物の事例であるが、大蔵村（現山辺町）の豪商稲村七郎左衛門家が所蔵する享保20年（1735）の「万福帳」がある。そこには村山郡西部方面から集荷した特産物が以下のように記されている（注96）。

大豆 2,450俵と424両 米 150俵 小麦 1,135俵 蠟 3駄29×300匁  
漆 127×100匁 青苧 64駄4分 紅花 170両代 萱 1,355把 荏油 17樽

このように、稲村家によって大豆が重要作物として村々から2,450俵（代金424両か）ほどが集荷されており、最上川舟運・酒田湊・日本海海運を通して京都・大坂方面に移出されていたものとみられる。

### 3. 年貢としての大豆

#### (1) 『会津農書』にみる

『会津農書』は、江戸時代前期の貞享元年（1684）佐瀬与次右衛門が著した会津藩政下の農業技術書として知られている。そこでは年貢としての大豆に関連して次のように記している（注97）。「穀物の大小麦、粟、大豆、ごま、えごま、小豆、ささげ、きび、そば、ひえ等は後述のように自給的である。特に大豆は貢納後の食糧として、大小麦と共に自給の比重が大きい」「畑方の大豆とえごまは年貢に納入しなければならない。藩は上納の余り大豆は味噌に煮候外、此外雑穀は塩代或いは夏冬の衣類代、農具調代、養代、品々に払う」。このように大豆は会津地方において年貢として納められていることが確認できる。一般的には江戸中期以降年貢はほぼ米と貨幣に統一され、田畑の本年貢（本途物成）は石高に応じて主として米で納めたようであるが、会津地方に限らず大豆も本途物成に組みこまれて年貢として納める場合も少なくなかったようだ。

なお、会津地方では、年貢として納める大豆のことを「蔵大豆」、一般に販売される大豆のことを「平大豆」という名称で使い分けしている。先にみたように、会津地方は福島県内でも大黒さまの信仰儀礼が明確におこなわれているエリアとして認められる。

## (2)長瀨村役場文書にみる

長瀨村（現山形県東根市長瀨）には、役場文書として明治8年（1875）に記された地主名簿が残されている。そこには米年貢とともに「大豆年貢」が記されていて、明治に入ってから地域事情によって大豆が年貢の一端を担っていたことが確認できる資料である（表3）（注98）。

米年貢	大豆年貢	氏名
490俵1斗6升	3斗9升	堀江左之助
438俵3斗3升	8俵 8升	寒河江茂吉
350俵1斗4升	29俵3斗7升	鈴木左近
346俵 7升		齋藤吉五郎
211俵2斗4升	135俵1斗5升	佐藤大麟
203俵3斗3升7合		奥山令勇
190俵1斗6升	2俵	長瀬長作
(中略)		
351俵2斗4升	225表4斗 5合	齋藤庄蔵
262俵4斗1升7合	111俵4斗1升4合	阿部龍太郎
114俵2斗6升7合	37俵 6升	村田利平次
81俵3斗6升5合	43俵4斗	齋藤小太郎

表3 長瀨村役場文書（明治8年）

これまでも触れたように、大豆は江戸時代に多くの地域で年貢や小作料の対象となって稲につぐ「社会的価値」をもっていたことが指摘されている。したがって、上記事例は長瀨村に限ったことではなかったことは記すまでもないが、米に対して大豆の年貢割合がどのぐらいかを米俵の多寡で具体的に示された事例として参考となるものである。

## 4. 近代以降の大豆作付面積と収穫量

## (1)山形県の大豆収穫量

山形県の大豆収穫量はどうか、統計は近代に入ってからであるが『山形県農業基礎統計—基礎資料編Ⅱ—』には、明治6年（1873）から昭和44年（1969）までのじつに97年間にわたる状況が統計データとして示されている（注99）。農作物の「作付面積」「反当収量」「収穫量」の3点についての詳細な記録である。本稿では、このなかから(1)稲～(5)まめ類の箇所（水陸合計）の稲・小麦・大麦・大豆・小豆・エンドウの6種の「収穫量」について、比較しやすいように明治10年（1877）からほぼ10年おきに数字を抜き出し一覧表を作成してみたものである（表4）。

			稲(水陸合計)	小麦	大麦	大豆	小豆	エンドウ
			石	石	石	石	石	石
明治	10年		857,341.6	8,813.2	27,824.6	57,083.1		
	20年		1,155,163	14,831	40,002	100,385	16,830	
	30年		906,462	16,637	39,989	74,070	13,410	
	40年		1,588,664	16,593	62,307	98,099	15,932	3,990
大正	元年		1,546,612	13,667	42,445	97,715	18,264	4,562
	10年		1,879,190	11,552	40,569	72,386	13,952	3,069
昭和	元年		1,935,621	6,747	24,720	57,905	11,543	24,477
	10年		2,107,199	22,525	28,886	50,454	10,100	3,081
	20年		1,671,116	16,613	17,367	25,586	4,942	254
	30年		2,998,000	96,000	56,700	104,100	13,300	10
	40年		506,200	3,460	1,080	7,800	1,690	1
	44年		574,310	399	89	4,250	727	

表4 山形県主要農作物の「収穫量」推移（単位：石）

この『山形県農業基礎統計—基礎資料編Ⅱ—』には、大豆・小豆・エンドウのほかにもめ類としてササゲ・落花生・そら豆・いんげん豆が載っている。しかし、本稿で一覧表に加えるまでもなく大豆の収穫量の多さは他を圧倒している。大豆はこの一覧表においてどの年代でも小麦・大麦よりも多いのは一目瞭然である。

#### (2)東北の大豆作付面積と収穫量

東北地方の大豆状況について「大豆のある生活 大豆の民俗学的考察」（『大豆の研究』農林省農政局編 1950年）に次のような引用文がある（注100）。「1930年代ごろの東北から九州に至る各地の農村に見られたダイズの民俗について、早川孝太郎は『豆（マメ）のある生活』のなかで、地域的に関東以東、ことに東北地方が一段と濃厚だが、この現象は文化の地域的傾斜を如実に物語るものかもしれないが、大きな特色である点は否定できないと述べている」。このように、早川が昭和初期の農村で大豆のある生活は東北地方が一段と濃厚であると語っていることは重要である。このことをさらに考える資料として、図2に「東北6県と新潟県の昭和27年度主要作物作付面積」の統計を示した（注101）。



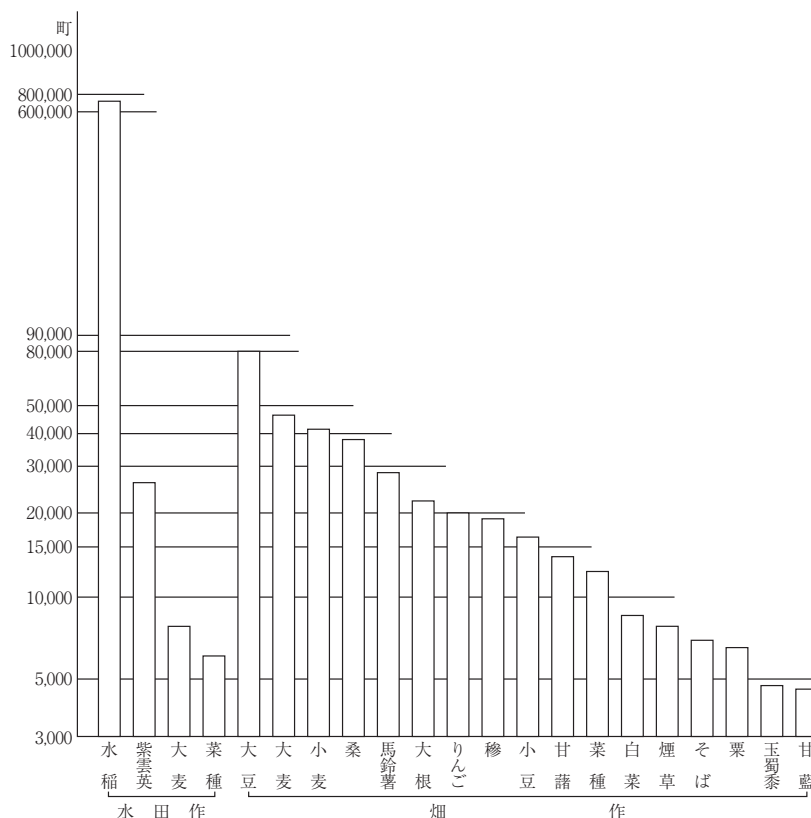


図2 東北6県および新潟県における主要作物作付面積（昭和27年以降）

また、次は全国の昭和29年度と昭和51年度の大豆の統計資料である（注102）。

	昭和29年度			昭和51年度		
	作付面積	10アール 当たり収量	収穫量	作付面積	10アール 当たり収量	収穫量
	ha	kg	t	ha	kg	t
全 国	429,900	87	376,000	82,900	132	109,500
北 海 道	95,400	45	43,000	16,600	182	30,200
都 府 県	334,500	100	333,000	66,300	120	79,300
東 北 北	114,400	94	108,000	27,100	116	31,460
北 陸	24,800	120	29,700	5,320	127	6,750
関東・東山	76,200	111	84,700	10,510	127	13,400
東 海	17,800	113	20,100	4,640	122	5,640
近 畿	13,100	105	13,700	3,600	115	4,130
中 国	24,000	80	19,300	5,130	129	6,620
四 国	9,240	110	10,200	2,430	131	3,170
九 州	55,000	86	47,300	7,480	107	8,030

表5 大豆の地域別作付面積と収穫量

上記図2から、他の作物と比較して東北および新潟を含んだ地域の大豆の多さが目立っている。また表5の全国地域別統計をみれば、東北地方の多さが一瞥しただけでわかる。このような大豆をめぐる歴史の実態は、早川孝太郎の指摘のとおりではないかと思われる。

最後の表6は、戦後の岩手県九戸郡軽米町の農作物の作付面積を記したものであるが大豆栽培に注目したい。

四五年	四〇年	三五年	三〇年	昭和二八年	
稲 四五	稲 三五	ひえ 四七	ひえ 四七	ひえ 四七a	一位
小麦 三三	ひえ 三一	大豆 三四	大豆 四〇	大豆 三四a	二位
大豆 三二	小麦 三〇	小麦 三四	稲 三一	小麦 二九a	三位
ひえ 三二	大豆 三〇	稲 三〇	小麦 二九	稲 二八a	四位
そば 一一	そば 一六	そば 一七	大麦 八	大麦 七a	五位
大麦 六	あわ 一一	大麦 一〇	小豆 五	小豆 四a	六位
小豆 六	大麦 八	あわ 一〇			七位

表6 一戸当り作物別作付面積の変遷（『軽米町誌』軽米町誌編さん委員会 1975年）

軽米町は岩手県の最北部に位置するが江戸時代は八戸藩の一部であった。この地域は太平洋岸に面しており、ヤマセの冷たい北東風が吹き付けて凶作・飢饉が頻繁におこり甚大な被害を受けた歴史をもつ。そのため冷害に強い稗（ひえ）が昭和35年まで作付面積の第1位を占めていたことはうなずけるが、大豆も第2位であったことにあらためて気づかされる。ヤマセが直撃する沿岸部一帯から山間部も含めて、大豆は凶作・飢饉の備えにも必要な作物（救荒食物）であったことがわかる。

### (3)「東北と大豆」の歴史性

先にも引用した岸本誠司の論文では、水田稲作や畑作を問わずマメ（大豆・小豆・ササゲなど）は全国の至る所で栽培されており、特に大豆は近世期に多くの地域で年貢や小作料の対象となって稲につぐ「社会的価値」をもっていたことが指摘されている。そしてマメ類を含む諸作物の構成と農耕のありようを知ることは、その地域の文化性を理解するひとつの指標となるとしている。岸本は「東北地方においては、その文化的深度からみても特にマメが大きな意味をもっていたと考えられる。東北地方はわが国の農耕文化のなかでマメの文化的意味がもっとも深い地域のひとつだといえよう」と述べている（注103）。

さらに岸本は、東北農耕文化におけるマメの重要性を再確認したうえで、今後の課題として4つを提示しているが、そのなかの1つに、「儀礼の問題—大黒の年取り、小正月の庭田植、節分など」をあげていることに大いに着目するものである。このような岸本の課題提起は、大黒信仰儀礼の背景に「東北地方と大豆」の歴史性が横たわっているのではないかと筆者の問題意識と合致しており、本稿を執筆する動機づけともなったことを述べておきたい。

## 第7章 考察

### 1. 大黒信仰儀礼の構造・構成原理

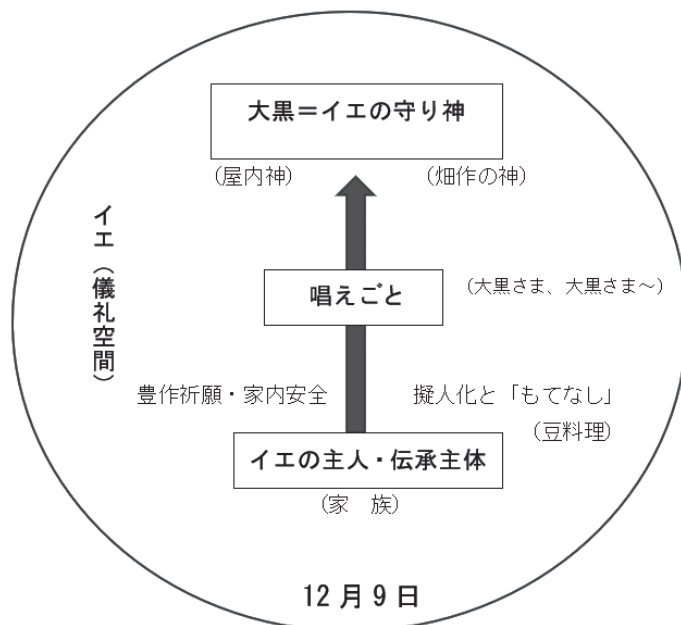


図3 大黒信仰儀礼の構造

#### (1) イエの信仰

東北および新潟県の大黒信仰儀礼は、イエ単位の「祀り」である。まさにイエイエで単独でおこなわれるものであり、集落の人々が一定の場所に集まり、リーダーのもとで多数で信仰行為を遂行するものではない。これに対して、小正月の火祭り「どんと・おさいと（左義長）」「虫送り」「病送り」「神送り」などは、地域共同体に所属する人々がイエイエを離れて屋外で共通の目的のもとで取り組む儀礼や民俗行事である。また「庚申講」など各種の「講」も信仰を同じくする地域の仲間が集って維持されてきた。これらを通して地域社会の連帯性が保たれてきたといえる。

一方、大黒への信仰心はまさに屋内で表明されるものであり、外からは見えない個的行為として実行される。儀礼に集団性がなく地域の連帯力で維持されてきたものではない。ともすれば消滅も考えられる最小単位であるイエでの単独行為であるが、それを維持してきた儀礼とは何なのか、何を求めての祈願なのかを検討する必要がある。本稿ではそれが大豆という畑作物の豊作祈願が主たるものではなかったかという捉え方を根本としている。

ここで1つの事例をあげたい。東郷村（現山形県東根市東郷地区）の大黒信仰について、「12月9日は俗に耳あけと称して、昔は9日までは奉公人又は職人の弟子入りがきまり、必ず年期約定証文を認め調印する慣例があった。そして此の日には夷大黒の神棚に二股大根と煎豆を供へて来年の幸福を祈る慣例がある」と記している（注104）。

ここで注目したいのは、文中に「奉公人又は職人の弟子入りがきまり、必ず年期約定証文を認め調印する慣例があった」というくだりである（文中「年期」は「年季」

であろう)。農家の奉公人または職人の弟子として、大黒さまの年取りの日にそのイエにおける1年間の雇用契約に調印するのが慣例となっていたということである。「耳あけ」の日にいわば職業上の労働慣行がおこなわれていたことになり、イエや奉公人・弟子にとって調印を済ませ、来たるべき年の幸福を祈る重要な節目の日であったことがわかる。同じことが高崎村（現東根市高崎地区）の『高崎村史』にもあり、「奉公人や弟子人は今日まできめて契約書に捺印するのである」とある（注105）。12月9日が労働契約確定日とされていたことは重要であり、両村周辺の農家や職人に広くみられたものと思われる。

## (2)神の機能

### ①屋内神

大黒さまはイエに鎮座する神であり屋内神である。農家の神棚には大黒さまのご神像が祀られている場合が多い。ご神像は木製が多くみられ、お社（やしろ）に入っていない場合は、囲炉裏で焚く煙で黒く煤けた姿をさらけ出して人々の目の届く位置に置かれている。容易に姿を現さずに奥まった場所に鎮座する畏れ多い神ではなく、むしろその逆であり、対面が可能な位置関係にある、より身近な神さまという印象が強い。大黒さまの脇には恵比寿（須）さまが置かれていることもしばしばみかける。上記の調査報告でも「恵比寿（須）・大黒」と一緒に唱えられて、しばしば信仰を同じくする神々とみられることもある。

### ②イエの守護神

大黒さまは農家にとってはイエの「守り神」（守護神）といえよう。江戸後期の『貞謾稿』『東都歳時記』では、三都（江戸・京都・大坂）はすでに大黒さまを祀る「甲子祭（きのねさい）」が盛んで、豆類や二股大根を供えて祈る信仰はすでに盛んであった。このことは再び以下で触れるが、これらの資料によれば、大黒さまは都市部の商人を含めた町民たちの金運・家運をつかさどり幸福をもたらしてくれる神、いわば「福の神」の性格になっていたと考えられている。このことについては戸部民夫にも関連する記述がみられる（注106）。つまり、大黒さまが福の神へと変容する背景に大黒さまと日本神話の大国主命との習合がある。そもそも大国主命がイエの繁栄をもたらす福の神という性格をもっていた。一方、大国主命のつかいがネズミ（十二支の子）とされることから、ネズミがイエの台所を守ってくれるという民俗信仰が発生し、大国主命とネズミの関係を土台として大黒さまはイエの神であるという信仰が生まれた。戸部民夫はそのように述べている。しかし、都市部での「甲子祭」での大黒信仰と東北の大黒信仰とはどう結びつくのだろうか。このことに関しては大変重要な問題をはらんでいるので、後にまた論じたい。

さて、本題として東北の大黒はイエの守り神（守護神）として何を守ってくれるのか、また何から守ってくれる神と考えられているのか。結論をいえば、農作物の豊穰（の約束）を守ってくれる神、あるいは農作物が受ける災害・被害から守ってくれる神という認識ではなかろうか。家内安全・身体堅固あるいは「福の神」というような全般的なものもあるだろうが、それ以上に、農作業に従事する人々の米・大豆を中心とした豊作への切なる祈りの心が根本にあるのではなかろうか。いうまでもなく、東北は冷害による凶作・飢饉で大量の犠牲者を生み出してきた土地柄であった。

ところで、東北地方にはカマガミサマやオシラサマのような固有のイエの守り神もみられる。カマガミサマは、竈（かまど）の神さまであり竈や台所の近くの柱や壁に



祀られる火防の神・家内安全等の神である。およそ旧仙台藩地域の宮城県北東部から岩手県東磐井郡にかけてと、宮城県北西部の古川市以西と奥羽山脈沿いの地帯にかけての分布密度が高い（注107）。東北地方ではカマガミサマは、上記以外の地域にはみられない限定された火災除けの神であるが、にらみつける憤怒の顔つきでイエの盛衰を厳しく見守り続けてくれるありがたい神さまと捉えられている。

次にオシラサマについて筆者の調査を踏まえて述べてみたい（注108）。オシラサマは青森県・岩手県・宮城県北部沿岸・秋田県の一部、オコナイサマは山形県庄内地方、オトウカサマは山形県置賜地方、オシンメイサマは福島県に分布している。地域によって呼称は異なるものの、それらの守り神は神棚の中でさらにお社に鎮座していたり、床の間で立派なガラスケースに納まっていたり、天井近くの一角に作られた棚などにも鎮座している。ご神像は多色の布きれや無色の和紙などで体全体をおおって多様な姿を示している。特徴的なことに、巫女（みこ）が関与して決まった祭日に布を着せ替え、遊ばせたり、オシラ祭文を唱えたりするが多い。その際に巫女を通した神のお告げもある。大黒信仰は外部から遮断されたイエという空間での信仰行為であるが、オシラサマなどは必ず巫女や神主が関与することで祈願が成立するものであり、外部との関係性があることが維持されるところが決定的に異なる。また、オシラサマなどの守り神は、養蚕の神・田の神・福の神・火伏の神・目の神など、イエの職業や個人的願望に応じてじつに多様な姿を示しており、大黒神のような一定性はない。これらの比較から儀礼における大黒の守護神としての特徴がみえてくるのではなかろうか。

### ③畑作の神

先に紹介したとおり、宮城県の大黒信仰についての論考を著した杉山晃一は、この日は「豆の収穫祭」という側面が考えられるとともに、大黒は畑作物の守護神としての性格をもっているのではないかと述べていた。また、南九州地方を調査した小野重朗は、大黒に大根を供え飾る事例が圏をなしてあることも畑作の神であることを裏付けているだろうと述べ、正月に畑作の代表的作物である二股大根を掛けたり吊るしたりして大黒に供えるのは、大隅半島の全域から曾於郡までの大隅のほぼ全体に及ぶとしていた。豆か大根かの違いはあるが、列島の南北で大黒が畑作の神であろうとの考えが両者によって示されている。

これまでみてきたとおり、新潟を含めた7県の儀礼呼称「お歳夜（年取り）」「大黒さまの嫁とり」「耳あけ」を通して貫くものは、畑作の2大作物の大豆と大根（二股大根）であった。このなかでも大豆が信仰儀礼の中心を担っており、この作物の豊穰を約束してくれるのが大黒さまであるというのが信仰の核心であろう。なお、「大根の年取り」は10月10日に全国的におこなわれてきており、大黒の年取りとはまったく別個のものといえる。

### ④擬人化された神

#### [豆づくし料理にみる]

先に、東北地方および新潟県では多少の差はあれ「豆づくし料理」が顕著であると述べた。青森県・秋田県・岩手県・宮城県などでは、48種類の豆料理を作って供えるという伝承が残っており、『奥州秋田風俗問状答』の「大黒天祭り」にも江戸時代からその多さを競った様子もうかがえる。山形県庄内地方の「大黒さまのお年（歳）夜」では、豆づくし料理としておよそ9種類が作られており、スーパーや個人商店では、

豆づくし料理に必要な食材の売り出しがおこなわれ、イエイエではじつに盛大な「お年（歳）夜」が今なお続いている。ちなみに、酒田市では「お年夜祭り」と呼ぶ祭礼化に及んでおり、「山王日枝神社にて神事・奉納演舞」「子ども大黒舞披露」「中心商店街にて大黒舞披露」「講話・松の勸進と大黒様の御年夜 羽黒山伏」などの催し物がポスターで大々的にPRされている。羽黒山伏は現在も「松の勸進」では庄内地方の全戸を回って大黒さまのお札を配布している。修験山伏が大黒信仰儀礼の広まりにどのように影響を与えたのかも今後の検討課題である。

以上、各地の豆づくし料理の実態は大黒さまへの「食による接待」といえよう。このことで思い出すのは、石川県能登半島の鳳至郡・珠洲郡地方に伝承されるアエノコトと呼ばれる農耕儀礼である。当地方では、稲作の作業が終わった12月5日に田の神（タノカンサー）をイエイエに迎え入れて収穫に感謝するための「もてなし」をおこない、翌年の2月9日に新たな年の豊作を祈願して田の神をイエから送り出すことを繰り返している。そのもてなしは祓で正装したイエの主人がおこなう。イエの奥座敷に御馳走をもった御膳を据えて田の神に語りかけるようにその料理の説明をする。料理は美味しいかどうか、お腹がいっぱいになったかどうか神に丁寧に問いかける。その後はお風呂に入ってもらうが（イエによっては食事よりお風呂が先の場合もある）、浴室まで導く途中も足元に気をつけるよう言葉をかけながら案内する（注109）。

アエノコトのもてなしぶりをみてみたが、東北の大黒信仰儀礼の「豆づくし料理」も、その「もてなし」（接待ぶり）は劣らず豪勢なものであることが理解できよう。それだけ擬人化された大黒への祈りや感謝の念が大きいと考えなければならないだろう。



写真7 「大黒さまのお歳夜」を掲げた酒田市内スーパーの光景  
(2017年12月9日・右側写真は、帝国データバンク機関誌12月号の筆者執筆文「季節めぐりの民俗」に掲載済みのものである。当該店による写真掲載許諾済み。)

#### [二股大根・嫁迎えにみる]

大黒信仰儀礼の呼称は、「嫁迎え」以外にメムカエ・ヨメトリ・オカタ（お方）ムカエなどという地域もあり、この呼称は新潟県までも含んだ広範囲にみられた。この日に大黒さまに二股大根を供えるのは、この儀礼の実施地域のほぼすべてでおこなわれている。『村山民俗』で述べた12月9日山形県小国町周辺の事例をここで再び引用する（注110）。「朴の葉や生紙（和紙）を大根に巻き付けて水引をかけ、それを着物

と帯に見立てて大黒さまに供える。これを大黒さまの「奥方(おかた)」といている。大黒さまは背が低く、頭は大きい顔は黒くて唇が厚い醜男だったので嫁のきてがなかった。お年越しの日だけは女性に見立てた白くて美しい二股大根を添わせてあげるという」。

以上の事例は大根の「二股」の意味するところを的確に表している。ここでは大根は視覚的にも奥方(花嫁) そのものの姿となる。坂本要は、この二股大根について「道祖神や歓喜天に供える儀礼からみてもわかるように、大根に性的象徴を託しているのである」と述べている（注111）。また宮田登もすでに二股大根は明らかに性的要素を持つものであり、大黒さまへ女性を添えることを暗示するものだと述べていた。なお、大黒さまを背後から見ると頭部が男根と同じかたちをしているということから、大黒さまは性神であるという俗信も生まれたことを付記しておく。

上記では、背が低く頭は大きい顔は黒くて唇が厚い醜男なので嫁のきてがなかったとじつに単刀直入である。イエの神をここまで卑近なたとえで言い表している。しかし、人々は「モテない大黒さま」を身近な男性に同情を寄せるかのごとく、じつに親しみをこめて擬人化している。

#### [耳が遠い・聞こえないにみる]

大黒さまは「耳が遠い・聞こえない」という言い伝えが各地に残っている。先に筆者はこう述べた。ガラガラと音を出す、大きな声を出して3度唱え言を発するなどは、大黒さまに対して大豆などの豊作祈願を必死に伝えるための「方便」であり、「大黒さまは耳が聞こえない」からという理由が代々伝えられてきたのはそのためかも知れないと。

その妥当性はともかく、神は人に対して元来「全能の姿」を示すものなのであろうが、イエの守り神が「耳が聞こえない」となぞらえることこそ、大黒さまを擬人化していることになるだろう。まさに「不具性」を付与することによって、より親近さが湧き出ることを求めたのかも知れない。前述したアエノコトにも同じ不具性がみられた。この儀礼の田の神は盲目がゆえにイエの主人は声を出して供え物の品々を1つずつ2回にわたり丁寧の説明する必要があったのである。この神も不具性を背負っているのであり、目と耳の違いはあれ不完全な神の姿は大黒信仰儀礼に通じるものがある。身体的負担を抱えこんだ神はより人らしくなり、人と同等の親和性を醸し出しながら飲食のもてなしを受け、嫁のきてを心配してもらうことが可能となる。これは東北の農民が生んだ知恵とでもいうべきものであるか。

### (3) 伝承主体・儀礼主宰者

#### ① イエの主人の役割

東北の大黒信仰儀礼の伝承主体はだれか。それはイエを代表する者であり、ふつうは一家の主人、かつては戸主・家長であった男性である。主人が儀礼の主宰者となり、神棚に向かって「大黒さま 大黒さま（以下略）」の唱えごとや一升枧に入った煎り豆の揺り動かしなど、一連の儀礼を主導する。家族は大黒に捧げる豆料理やお頭つきの魚などを準備して神棚の前に供える。儀礼終了後は枧に入った煎り豆を年齢の数だけ家族でそれぞれ食べ合うなどの場面もみられる。当夜は主人を中心に家族内で協力し合いながら儀礼をとりおこなう。大黒の儀礼はこのように主人を伝承主体として家族という最小単位で維持してきたものである。

一例として、筆者の調査地の1つ山形県最上郡大蔵村では、代々主人が使用した袴



を着用して儀礼にのぞんでおり、その厳格性の一端を知ることができる（注112）。同じように東根市の事例では、「正装した家長」が大黒に向かって大声で唱えごとを発し、豆の入った杓を揺り動かす様子が語られている（注113）。また庄内地方では、大黒にお供えしたものは下げてからいただく。しかし、いただくのはその家の主人だけである。他の人たちは食べてはいけないことになっているとされ、大黒さまの儀礼における主人の存在感が注目される（注114）。「大黒柱」とは家の支柱ともいうべき存在を言い表す。この点からも大黒さまはその家の盛衰・消長と大いに関わりをもつ神であり、東北のこの儀礼の伝承者・主宰者は一家の大黒柱＝イエの主人であることがある意味当然なのかも知れない。

一方、先にみたオシラサマ・オコナイサマなどの信仰の伝承主体はイエに暮らす者であることに変わりはないが、主人に代わり「家刀自（いえとじ）」つまりイエの主婦であることが圧倒的に多い。女性どうしがオシラ遊ばせの機会にイエの中で交流し合う場もみられることから、主体はイエの女性単独でありながら、信仰を維持するにあたって何らか互いに影響を受けあっていることが考えられる。それに比して大黒信仰儀礼の場合、主宰者どうしの儀礼をめぐる交流や協力し合うことなどはおそらく一切ないものとみられる。そういう面においてこの儀礼は主人によるほぼ単独行為とっていいだろう。

## ②東西比較にみる特徴

ところで、岩井宏實は大黒が何の神さまかについて、次のように述べている（注115）。

東日本では恵比須が田の神とされているように、西日本では大黒が田の神として祀られ、四国・九州では秋の収穫後、親類・縁者が集まって祝宴をはるが、この祝いを「大黒祝い」というなど、その例は多い。また、大黒は台所の戸棚や柱の上に恵比須と並べて祀られ、ふつう主婦がそれを司祭する。毎日のお茶とご飯を供えるところがあるし、味噌の神さんだといって、味噌作りの日に神酒や焼酎を供えたり、あるいは女の神さんだといって、機を織るときにオリタテを供えるところもある。

このように、大黒の信仰については西日本と東日本に大別して捉えられており、かなり異なった様相がそこに生まれている。「西日本では大黒が田の神として祀られる」ことについては、すでに触れたように南九州の大黒信仰を調査した小野重朗の「元来は畑作の神だったのが、時代の流れでしだいに水田稲作の神に変わっていった」という指摘があることを繰り返しておく。

ここでは、伝承主体からんで大黒信仰は「ふつう主婦が司祭する」という点に注目しておきたい。儀礼の伝承主体が一般的に男性である東北とは逆である。また西日本では大黒さまを「女の神さん」という地域もあるというが、東日本の大黒さまが「嫁迎え・ヨメトリ」することとはまったく逆の観念である。このことは、東西日本の文化比較において数多くある差異の1つとして捉えることができよう。大黒信仰儀礼の伝承主体における東北の特徴点が浮かび上がってくる。



## 2. 伝承の変化についての空間差・時間差

### (1)伝承の入り組み状況

大黒は「耳が遠い・聞こえない」と伝えられている地域があったことはすでに述べた。青森県田子町では、大黒は耳が聞こえないので、大根に箸をさしてこしらえた槌で膳の縁をたたく。新潟県北蒲原郡では「耳あけて豆つまっしゃい」の唱えことばも、大黒は耳が聞こえないけれどもどうぞ豆を召し上げて下さいとのことであろう。しかし、他方では大黒に向かって「来年はいい耳聞かせて下さい」という願いを唱える地域もあった。この地域は信仰儀礼を「耳あけ」と呼称する山形県内陸部の村山地方と置賜地方であり県内3分の2に近い大きなエリアを形成している。

ただし、岩手県大船渡市蛸の浦地区のように「よい耳聞かせてけらっせん」と「耳あけ」地域と同じように唱えるところもある。宮城県宮城郡の「お大黒様 お大黒さま耳をあけていますから よい耳を聴かせて下さい」も同様に「来年はいい耳聞かせて下さい」に通ずる。

また逆の事例として、山形県最上郡大蔵村合海地区のように「大黒 大黒 福大黒 耳あけて豆あがれ」といい、耳が遠い・聞こえない地域と似たような唱えごとが述べられている。この地域では「耳あけ」ではなく「聞かず大黒（聞っかず大黒）」の呼称が比較的多い。「聞っかず」とはやはり「つんぼ」の意味だという（注116）。

さらに山形県川西町西大塚地区では「耳あけ」と呼称しているが、大黒は「つんぼ」であるという説があり、耳が聞こえなければ良いことも聞こえず、良いことも教えることができない。そこで耳あけという行事が生じたと伝えられている。どっちつかずのまぎらわしい事例もある。宮城県金成町長根（現栗原市）の「耳あげで良いこと聞くよう 悪いごと聞かえよう」は、耳をあけてよいことを聞くように 悪いことを聞かないように、という唱えである。大黒に耳をあけて良いことを聞いてもらうのか、あるいは人間が耳をあけてよいことを聞き、悪いことを聞かないようにするのか。どちらか判別し難く中間形態といえようか。このように、唱えことばや言い伝えは伝承地でいささか複雑に入り組んでいるのが現状である。

### (2)変化した伝承

全体を俯瞰してみた場合、統計的に実数をあげて比較することは困難であるが、大黒が「耳が遠く・聞こえない」地域のほうがエリアとして多いように見受けられる。ここでは概して大黒への唱えことばは少なく、まったくない場合もみられる。大まかにいうならば、この地域は山形県村山地方と置賜地方をのぞいたエリアと指摘できようか。以下は柳田國男の方言圏論を意識して述べるわけではないが、民俗信仰における言語伝承の変化の観点からこの問題を考えてみたい。

つまり、本来は大黒自身が「耳が遠い・聞こえない」のであるが、いつしか大黒に「来年はよい耳を聞かせて下さい」と願う言葉に変化していったと考えられないだろうか。これは川西町吉島地区の「耳をあけていますから ええごと聞かせておごやえ」のとおり、人間側が「いいことを聞かせてくれるよう」お願いするかたちに伝承が変化していったことが考えられる。「いい耳」とは、たぶん「良い出来事・良い知らせが耳に入る」という意味に解釈できるのではなからうか。そうであれば、それは農民側への豊作の知らせであり、信仰儀礼はいわゆる「予祝」（来年の豊作を前もって祝う）という意味合いをもってくることになる。そう考えると、お膳に並べられた豆づくし料理等は豊作感謝への事前もてなしという色合いが濃くなる。

いったいこの違いや変化は何を意味するのであろうか。まったくの推論になるが、東北の大黒信仰儀礼は、主として「耳が遠い・聞こえない」地域により早く伝承が広がり、時間的な古さをもつのではなかろうか。このことは、アエノコト儀礼における田の神が盲目であるという「不具性」をヒントにしてのことである。それから「耳が遠い・聞こえない」ことの意味は明解であるが、「いい耳聞かせて下さい」の意味・表現はわかりにくい。言葉が曖昧になりやや崩れているといえる。長い時間空間の伝承過程において言語表現に変化が生じ、本来の言葉の曖昧化が進むことはありえるだろう。そういう見方に立てば、「耳が遠く・聞こえない」の伝えがもともとあったものであり、時間的にも先立って流布されたものと考えすることも可能である。かつて置賜民俗学会副会長だった奥村幸雄の論考でも同じような見解がみられる（注117）。

そうすると、「耳あけ」呼称地域はその後大黒の儀礼伝承がなされたエリアとみることができ、山形県の村山地方と置賜地方がおおよそそれに相当する。結果として、唱えことばは「来年はいい耳聞かせて下さい」に置きかわり、「耳あけ」の耳は大黒のものではなく人間の耳に変わったのである。このことが一定のエリアに集中していることを踏まえれば、この変化はあまり時間をおかずに広がったことも考えられる。唱えことばが「来年の良い知らせ」を求める内容に変化したことによって、先に述べた「予祝」の意味も含めて、大黒への願望がより具体的に強まったとも捉えられる。このように東北の大黒信仰儀礼は、空間差と時間差を経ながら、新潟県を含むじつに広域的な固有の民俗文化現象として今日まで継承されてきたのではないかと思われる。



図4 山形県の「耳あけ」分布地  
『山形県民俗地図』(山形県文化財保護協会 1980年)

### 3. 「甲子祭（きのえねさい）」または「甲子待（きのえねまち）」

#### (1)三都「甲子祭」の信仰儀礼

江戸後期の『守貞謄稿』と『東都歳時記』にみるように、江戸・京都・大坂の三都では60日に1回訪れる甲子の日に大黒さまを祀る甲子祭があった。特に重要なのは11月の甲子祭であった。『東都歳時記』の「甲子日」の項では、「毎月 大国神参」として人々が参詣する大黒天を祀る江戸の神社仏閣12か所が記載されていて、いわば当時の流行神であった一面を伝えている。また、「俗家にも此の神を祭り」とあって、一般宅でも二股大根や豆類を供物として捧げて祈りを行っていたことを伝えている。大黒は少なくとも江戸期から三都の都市部で、商人を含んだ町人たちの金運・家運、庶民生活の幸福を願う「福の神」信仰の対象となっていたことは前に述べたとおりである。

先に紹介したように、小野重朗は南九州地域では家ごとに大黒を畑作の神として旧暦11月初子の日に大黒祭りをおこなっているとあったが、それはまさに江戸期「甲子祭」の現代版ともいえるべきものであろうか。日本列島の広範囲にわたって大黒祭りがおこなわれていた可能性が考えられる。

#### (2)「甲子待」・「子待（ねまち）」・「子待講」

##### ①全国の状況

中世の公家の日記によれば、室町時代の京都で「甲子待（きのえねまち）」といわれる講が習俗となっていたことが記されている（注118）。この「甲子待」という講は、じつは三都の「甲子祭」とほぼ同じ信仰内容だったとみられているのである（注119）。そうならば「甲子祭」の根源は、少なくとも室町時代までさかのぼることが可能となる。

「甲子待」は「子待（ねまち）」または「甲子講」（「子待講」）ともいわれ、集団による講がおこなわれたことを示す石造建立もおこなわれている。『日本石仏事典』によれば、その碑文は正面に「甲子塔」「子待塔」「大黒天」などと刻印されている。石造碑は主に農村部にみられて農民10人前後の講中によって建立されたものが多く全国的に分布している。なかでも特に東日本と関東・甲信越に多い。東北では青森県津軽地方20基、宮城県仙台より北部地域27基、宮城県南部白石市33基、山形市9基が明らかにされているが、ほとんどの講は現在では廃絶しているという。全国的にみて建立年代は江戸時代後期が多い。最古は「日本最初 甲子大黒天 天和元年」（1681）の銘があり埼玉県富士見市にある石造碑とされる。講で出される料理は、小豆飯・大豆や黒豆の入った食事が多く二股大根を供える所もある。ご利益として作が良くなる、金がたまるなどといわれている（注120）。

##### ②山形県の状況

ここで「甲子待」と同種の「子待講」が山形県に多数存在することについて触れたい。以下は加藤和徳の調査研究に基づいて記す。加藤は石造碑「甲子塔」「子待塔」「大黒天」などの石造碑は大黒信仰を表すもので、市町村単位で見れば以下のような事例がみられるという。その内訳は、置賜地方では米沢市15基、南陽市9基、長井市・飯豊町・小国町で5基、白鷹町30基、高島町9基、川西町6基である。村山地方では山形市29基、上山市25基、寒河江市12基、山辺町11基、中山町1基の合計152基である。建立時期はやはり江戸時代後期の文化・文政頃が多いようである（注121）。

他方、加藤は近年に置賜地方の長井市における大黒信仰を表す石造碑を調査し、新

たに8基を報告している。内訳は「大黒天」が寛政10年（1798）・文化2年（1805）・文化13年（1816）、「甲子」が文化10年（1813）・元治元年（1864）3月・元治元年4月、「子待塔」が文化元年（1804）4月・同年7月の銘をもつ。建立は3月・4月・8月・6月・10月など一定しておらず、11月・12月は1つもない（注122）。

「講中」と刻まれたものは3基のみで意外に少なく、文化2年銘の「大黒天」は「梅津久兵ヱ」とある。講による集団信仰ではなく個別（イエ）の信仰があったことも想定する必要がある。なお加藤によれば、大黒信仰関連石造碑はこのほかにも蔵王連峰の熊野・刈田岳周辺にも複数存在するという。



写真8 石造碑「甲子塔 元治元年4月24日 講中」（加藤和徳氏撮影）

さらに石造碑を付け加えると、『新庄の石佛』の記述では1基の「大黒天」が新庄市内泉田八幡神社境内にあり、江戸後期安永8年（1779）10月14日の銘がある（注123）。また『田沢郷土誌』（米沢市田沢）では「子待塔」2基、「甲子待供養塔」2基、「大黒」1基が記載されている（注124）。

以上のように山形県内陸部にじつに多数の大黒信仰を表す石造碑があることは大変興味深い。

### ③講と信仰儀礼との関係

ここで旧版『長井市史』に掲載された石造碑「大黒天」の説明文を以下に引用しておきたい。「講中が11月7日の夕刻より集まり子の刻（夜の12時）に大黒天を祭る行事をおこなったものである。その講中によって造立されたのが子待塔である。現在ではこの行事は全く衰え、『お大黒様の日』として12月9日に家庭内の行事として形を変えて伝わっている。長井では「耳明け」とも言われ、二股大根といり豆を供える」と記されている（注125）。

11月7日は、全国的に1年間の甲子日のうちでは最大の大黒祭りとしてされており、この日は江戸時代に講という集団信仰のかたちでおこなわれていた。しかし、現在では山形県も含めてほぼおこなわれていない。そこで疑問が生じるのは「甲子待」や「子待講」に代わるものとして新たに東北の大黒信仰儀礼がおこなわれるようになったの



か。あるいは、両者は同時期におこなわれていたが大黒信仰儀礼だけが残ったということであろうか。このことは東北全体の大黒信仰に関わる解明すべき重要な部分である。

#### 4. 信仰儀礼の「東北的変容」とその背景

##### (1) 『奥州秋田風俗問状答』にみる「大黒天祭り」

ここで江戸後期の『奥州秋田風俗問状答』について述べる。執筆者とされる那珂通博の「跋」には文化11年（1814）12月とあるので、本稿ではひとまずこの年号を執筆年代としておく。この書では前半を「秋田六郡神佛之部」、後半を「秋田城下之部」と区分けして記載している。注目すべきは「秋田城下之部」12月の項に「大黒祭り」が述べられていることである。以下にその関係する部分のみ引用してみる（注126）。

9日には大黒天祭りなり。これも戸ごとにする。供物は七色菓子とて大豆にて調したる干菓子やうの尤も麩なるもの也。膳菜四十八品といふ。皆大豆にて調す。膾などの大豆ならざるは黒豆を煎りてふりかくるなり。是は大やうの事にて必ず四十八品に限れるものにもあらず。飯はなべて黒豆をかて、炊く也。あるいは其豆飯を升に堆く盛て葉鮓を添へて供るなんどもあり。神酒餅二股大根とも備ふるにて候。

このように秋田城下では12月9日「大黒天祭り」がおこなわれていたことを確認することができる。それは「戸ごとにする」とあるのでイエイエでおこなわれるものであった。つまり講のような集団ではなくイエにおける信仰儀礼であることを明確に示している。「供物は七色菓子」とは先にみた『守貞謄稿』の甲子祭の供物「七種菓子」に似ており、都市部とほぼ同じことが秋田でもおこなわれていた可能性を示唆している。「四十八品」とは現在の「豆づくし料理 48品」に通じるものである。また供物として二股大根も供える。要するにこの大黒天祭りは、現在もみられる東北の信仰儀礼と基本はほぼ同じであったといえよう。ただし、一升榊に煎り豆を入れて振ったり、その際に大きな声で唱えごとをするなどは記されていない。それは後世に取り入れられたものだろうか。

ところが城下外である「秋田六郡神佛之部」には「大黒天祭り」の記述がない。幕府に提出した『諸国風俗問状答』のうち、秋田以外の東北では『陸奥国信夫郡伊達郡風俗問状答』『奥州白河風俗問状答』がある。この2つの12月の項周辺にも「大黒天祭り」は見当たらない。つまり、北は秋田から南は『肥後国天草郡風俗問状答』までの21か所で「大黒天祭り」は秋田1か所しかみられないのである。

『奥州秋田風俗問状答』「大黒天祭り」は東北の一角における事例ではあるが、現在と本質を同じくする東北の大黒信仰儀礼は江戸後期にはおこなわれていたことが明らかである。ところで、『日本石仏事典』でみたように「甲子待」「子待講」は山形県のみならず宮城県や青森県でもおこなわれていたことを示している。留意点はこのような講がおこなわれていた一方で、同じ大黒信仰を表すイエの儀礼がおこなわれていたということである。しかしそれは城下の都市部にほぼ限定されていたのではなかろうか。特に豆づくし料理などのもてなしの豊富さを考えれば、凶作・飢饉で食うに食われぬ江戸期東北農村の零細農民のあいだで現在のような儀礼がおこなわれていたとは考えにくい。先ほど「秋田六郡神佛之部」では「大黒天祭り」は記載されていない

と述べたが、六郡とは雄勝郡・平鹿郡・仙北郡・河辺郡・秋田郡・山本郡であり城下から離れた農村部なのである。

このことから、現在のような信仰儀礼が農村部まで広くおこなわれるようになるのは明治時代以降のことではないかと考えた。なぜなら「子待講」「大黒天」等の石造碑は江戸後期頃まで建立されているが、明治時代以降に建立されたものはほとんど見出されていない。このことは、明治に入るとしだいに講は行われなくなって現在の信仰形態に代わっていったことを暗示しているのではなかろうか。先に『東郷村史』にみられる「耳あけ」をみたが、この書物の初版本『東郷村誌』は大正4年(1915)の発行である。山形県の農村の一部エリアでは大黒信仰儀礼はおそらく明治時代にはあったであろうことが考えられる。

江戸期の農村部でも、一部の自作農民で富裕層を中心に現在のような大黒信仰儀礼はおこなわれていたかも知れない。しかし大きな流れとしては、江戸後期以降しだいに講からイエの儀礼へと代わっていく。さらに11月7日から12月9日へと変容する。このことは他地域にはみられない「東北的変容」といえるのではなかろうか。

では東北の信仰儀礼が12月9日になったのはなぜであろうか。『総合日本民俗語彙』では「甲子の日を祀る習わしは他の地方にもあり、古くは子の月、すなわち11月の7日に、ネマツリとって大黒を祭ったこともある(運歩色葉集)。12月の上弦の日の祭を、大黒様にした根元はまだ明らかになっていない」と記しており、本稿でいう「東北的変容」の理由はわからないとしている(注127)。『奥州秋田風俗問状答』には12月9日と明記されているので、跋文の書かれた文化11年(1814)以前にはこの日取りが確定していることになる。なぜそこに設定されたのか、その説明は今後の課題としなければならない。

## (2)信仰儀礼の背景にある「東北と大豆」

現在の信仰儀礼が東北のみにしかみられない要因・歴史的背景は何か。このことを以下に仮説として提示したい。先にみた文献史料や統計データからいえるのは、江戸期以降に東北が大豆生産の比較的盛んなエリアであったことが根本にあるのではなかろうか。江戸期の藩政時代では東北の大豆の他領地への移出が意外に多かった事例をみた。盛岡藩などを中心に農民への大豆栽培への働きかけが大きかった歴史的事実もあった。また、年貢として米以外に大豆がみられることの記録もある。さらに明治時代以降の大豆の作付面積や収穫量を全国規模や地域単位でもその多さが目立っていた。このようなことを踏まえれば、農家の人々にとって米とともに生活に大きく影響する重要作物が大豆だったと考えられる。ゆえに生活必需作物としての大豆への豊穰祈願がきわめて高かったと思われ、それをもたらず大黒への信仰儀礼は欠かせないと考えたのであろう。

加えて、東北には小正月の庭田植(雪中田植)の儀礼もあった。降雪地域の一带では稲藁と一緒に豆殻を雪に突き立てて豊作の予祝をおこなってきた。水田稲作の豊作とともに大豆を代表とする畑作の豊作も祈ったものと捉えることができる。それは江戸期の菅江真澄の記録にも見出されるものであり、大豆祈願を根底にもつ大黒信仰儀礼の根強さを根拠づける事例と受けとめられる。

山口弥一郎は「東北と食習」のなかで、陸前・陸中・陸奥(現岩手県)の12月9日大黒様のメムカエにおいて48種の豆料理・二股大根の供物がつくられることを記している。記述は二戸・三戸・北津軽、さらに会津地方の豆料理まで及んで幅広く取りあ

げているが、それを執筆したのは昭和19年（1944）のことである（注128）。しだいに物資が乏しくなる戦争の時代にあっても、東北の大黒信仰儀礼は途切れることなく継承されていたことを示す大切な記録である。また山口は「東北地方は北海道や、朝鮮、満洲等と共に豆を多く食ふ地方で、（中略）殊に東北の北半にはマメシトギ、ゴ汁等の如き、豆の古い食習の名残と思はれるものがみられる」と記しており、「東北と大豆」の深い関係はここにも見出されるのではなかろうか。

結論として大豆の生産と収穫量の多さ、それが東北の農民生活の一端を支えたものであり、その祈りと感謝が12月9日の大黒信仰儀礼を生み出したと考えることができる。

## まとめ

以下は、これまで述べてきたなかから要点のみを簡潔に記すことにする。

- (1)東北地方では、12月9日（地域によっては10日）に大黒信仰儀礼がイエ単位で行われていて、守り神に供物として二股大根と豆料理を捧げることが共通している。その伝承は青森県下北半島から福島県会津地方および新潟県中部以北の広範囲にわたる。それらの実施状況を分析してイエ単位の儀礼、イエの主人が伝承主体、擬人化によるもてなしなどの儀礼構造と構成原理を明らかにした。
- (2)山形県内の『東郷村史』『高崎村誌』からわかったことは、戦前に12月9日大黒信仰儀礼の日は奉公人・弟子たちが年期契約証文に調印する慣例となっていたことである。この日は翌年の労働雇用をめぐるイエの繁栄に関わる重要な日であったことがわかる。同時に「年（歳）夜」「年取り」という1年の大きな節目の日であったことがいっそう浮かび上がる。儀礼がなぜ東北では12月9日に変容したのか、民俗事象を実生活に結び付けて考える視点から検討の余地はまだある。
- (3)年中行事で12月の項の全国の諸資料を比較してみると、大黒信仰儀礼は東北・新潟方面にしか見受けられない固有性のある儀礼であることがわかった。なぜこの儀礼が日本列島の特定地方でのみ見受けられるのか、他地方にみられない要因・背景は何かについての見解を述べた。
- (4)日本では大黒信仰を表す「甲子祭」が中世から続くと言われており、江戸時代には江戸・京都・大坂の三都で盛んであった。これがさらに地方においては「甲子待」「子待講」などの講という集団で信仰が行われていたことが認められた。講がおこなわれた記念に石造碑が建立されて残っているが、それは主として東日本に分布しており、おおよそ江戸時代後期のものが多い。山形県内を含めた東北地方にも講および石造碑が広く分布していることがわかった。
- (5)三都の「甲子祭」や各地の「甲子待」「子待講」は現在ほぼ廃れたといわれている。一方では東北の大黒信仰儀礼は依然として現在まで伝承されている。江戸後期の『奥州秋田風俗問答巻』では、城下で12月9日「大黒祭り」が行われており、その儀礼の本質は現在の大黒信仰儀礼につながっていると考えた。しかし城下や都市部はともかく、寒村であった東北農村部の生活事情からすれば、この信仰儀礼は明治時代以降に広まっていったのではないかと考えた。
- (6)本稿では、信仰儀礼の供物として共通する大豆に着目して文献史料・統計データを

収集・活用して検討した。その結果、東北地方では江戸時代から大豆生産が盛んであり、明治時代以降も作付面積や収穫量が比較的多かった事実を知ることができた。

(7)東北のみに現在のような大黒信仰儀礼が定着していったとすれば、そこに「東北的変容」があったのではと考えた。その変容とは、祭りや講という集団信仰からイエの神の信仰に代わるという伝承者主体の変容、唱えごと・豊富な豆づくし料理への変容、11月7日から12月9日への変容などである。

(8)現在のかたちの大黒信仰儀礼はなぜ東北だけに伝承されているのか。それは歴史的に東北の大豆生産量の多さが背景としてあったからではないか。農民の大豆の豊作祈願こそ信仰儀礼を確たるものにしていったのではないか。それを仮説「東北と大豆」という象徴的表現で提示した。

(9)「東北と大豆」説を補強するものとして東北各県の「庭田植」の予祝儀礼を取りあげ、ほぼすべてに豆殻が使用されていることを明らかにした。庭田植は菅江真澄が天明6年(1786)に記していることを見出し、本稿には欠かせない事例として掲載した。すでに江戸中期頃から稲(米)に劣らない農民の大豆祈願の強さを示す貴重な記録として重視したい。

(10)山口弥一郎が昭和19年(1944)にまとめた東北の大黒信仰儀礼の実施事例は、戦争のさなかでも岩手県をはじめとする東北の広い地域で儀礼が続けられていたことを示している。イエの守り神の伝承主体者(家長・戸主)が出征しているあいだも、家族が儀礼を守り抜いたものと思われ、この儀礼の根強さがあらためて裏付けられる。また山口は「東北と大豆」の深い関わりにも言及していた。

## おわりに

管見では東北・新潟方面の大黒信仰儀礼を広域的・総体的に研究したものは見当たらない。先行研究を手がかりとしながらもいくつかの推論や仮説を立てながらの論述となった。本稿は文献史料・統計データの活用が主となったが、コロナ禍で不十分だった現地での聞き取り調査も今後は順次おこなっていき、いくつか残された課題の解明へとつなげていきたいと考えている。

いくつかの課題のなかで2つあげておきたい。1つは、『奥州秋田風俗問状答』が書かれたほぼ同じ江戸後期に、菅江真澄は東北の生活文化を克明に綴った膨大な日記を残しているが、今のところ大黒信仰儀礼について触れた箇所を見出せないでいる。やはり主に農村部ではその頃は行われていなかったことも考えられる(「かすむこまがた」1月2日の項に「飲めや大黒 謡へやえびす」の歌を歌うことは記されている)。2つは大黒舞の芸能についてである。古く中世には始まっているが門付けとして一般の家々を回るのは江戸時代からである。その大黒舞は東北の大黒信仰儀礼とどのように関わりをもったのかについて検討する必要がある。しかし本稿では論点が多岐にわたり散漫になってしまうこと、かつ紙幅の制限もあることなどの理由からあえて取りあげなかった。



[謝辞]

本稿執筆のきっかけとなったのは、伝承文化支援研究センター主催「大黒さまシンポジウム」であった。その際にコーディネーターを務めていただいた東北工業大学ライフデザイン学部教授の岸本誠司氏には「東北農耕文化とマメ」の研究論文を頂戴し、東北の大豆栽培と歴史等に関するご教示をいただいた。また庄内地方の「大黒さまのお年（歳）夜」に関する多くの写真も提供していただいた。同じくパネリストを務めていただいた酒田民俗学会会長の春山進氏にはご教示と大黒さまのお札を頂戴した。同じくパネリストで置賜民俗学会副会長の守谷英一氏にもご教示と写真提供をいただいた。伝承文化支援研究センター員の皆さまにも多くの資料や写真提供をいただいた。本稿執筆にあたっては、日本石仏協会理事の加藤和徳氏に長井市をはじめとする山形県内の「甲子待」「子待塔」「大黒天」等の石造碑や山形県村山地方の大黒天信仰についての各論文を頂戴した。以上の皆さま方にはここに記して心より御礼を申し上げる。

[注]

- 1 『民衆宗教史叢書第29巻 大黒信仰』大島建彦編 雄山閣 1990年
- 2 同 上 P 275 - P 288
- 3 喜多川守貞『守貞謾稿』翻刻第四巻 東京堂出版 1992年 P 93
- 4 斎藤月岑・朝倉治彦校注『東都歳時記』1 東洋文庫159 平凡社 1970年 P 31
- 5 宮田登「恵比須・大黒・福の神」『民衆宗教史叢書第29巻 大黒信仰』大島建彦編 雄山閣 1990年 P 245
- 6 同 上 P 245
- 7 杉山晃一「宮城県の農耕儀礼の一考察—大根をめぐる伝承を中心として—」『民衆宗教史叢書第29巻 大黒信仰』大島建彦編 雄山閣 1990年 P 247 - 254
- 8 小野重朗「大黒様」『民衆宗教史叢書第29巻 大黒信仰』大島建彦編 雄山閣 1990年 P 261 - 266
- 9 柳田國男監修『改訂総合日本民俗語彙』第2巻・第4巻 民俗学研究所 平凡社 1955年・1956年 P 836・P 1577
- 10 野本寛一編『日本の心を伝える年中行事事典』岩崎書店 2013年 P 175
- 11 『村山民俗』第32号 村山民俗学会 2018年 P 23 - 37
- 12 『東北の歳時習俗』明玄書房 1975年 P 73
- 13 『下北半島北通りの民俗』青森県史叢書 青森県 2002年 P 150
- 14 『馬淵川流域の民俗』青森県史叢書 青森県 2002年 P 177
- 15 同 上 P 177
- 16 『小川原湖周辺と三本木原台地の民俗』青森県史叢書 青森県 2001年 P 125
- 17 同 上 P 125
- 18 『東北の歳時習俗』明玄書房 1975年 P 229
- 19 鈴木棠三『日本年中行事辞典』角川書店 1977年 P 669 - 670

- 20 秋田県文化財調査報告書第7集『秋田県の民俗』秋田県教育委員会 1966年 P115  
 21 同 上 P117  
 22 柳田國男監修『改訂総合日本民俗語彙』第4巻 民俗学研究所 平凡社 1956年  
 P1577  
 23 『日本の民俗 岩手』第一法規出版 1971年 P260  
 24 同 上 P260  
 25 柳田國男監修『改訂総合日本民俗語彙』第4巻 民俗学研究所 平凡社 1956年  
 P1577  
 26 同 上 P1577  
 27 『岩手県史』第11巻 民俗篇 岩手県 1965年 P401  
 28 同 上 P401-402  
 29 『東北の歳時習俗』明玄書房 1975年 P128-129  
 30 工藤紘一「聞き書き 岩手の年中行事」『岩手県立博物館研究報告』第28号 岩手  
 県立博物館 2011年 P64  
 31 鈴木棠三『日本年中行事辞典』角川書店 1977年 P669-670  
 32 『日本の民俗 宮城』第一法規出版 1974年 P240  
 33 『東北の歳時習俗』明玄書房 1975年 P179-180  
 34 『祭礼と年中行事』仙台市歴史民俗資料館 2003年 P75  
 35 鈴木棠三『日本年中行事辞典』角川書店 1977年 P669-670  
 36 柳田國男監修『改訂総合日本民俗語彙』第4巻 民俗学研究所 平凡社 1956年  
 P1577  
 37 鈴木棠三『日本年中行事辞典』角川書店 1977年 P670  
 38 山形県教育委員会「祭り・行事」民俗調査記録票 2004年  
 39 同 上  
 40 同 上  
 41 同 上  
 42 同 上  
 43 井上武夫『大高根風土記 生活行事と郷土芸能』かがやきの里大高根推進協議会  
 2018年 P51  
 44 『東北の歳時習俗』明玄書房 1975年 P275  
 45 柳田國男監修『改訂総合日本民俗語彙』第2巻 民俗学研究所 平凡社 1955年  
 P837  
 46 鈴木棠三『日本年中行事辞典』角川書店 1977年 P669-670  
 47 山形県教育委員会「祭り・行事」民俗調査記録票 2004年  
 48 同 上  
 49 同 上  
 50 『日本民俗地図Ⅱ』文化庁編 年中行事2 1971年 P121  
 51 野本寛一編『日本の心を伝える年中行事事典』岩崎書店 2013年 P175  
 52 佐藤義則『小国郷夜話』山形県郷土文化研究所 1964年 P165  
 53 鈴木棠三『日本年中行事辞典』角川書店 1977年 P669-670  
 54 柳田國男監修『改訂総合日本民俗語彙』第2巻 民俗学研究所 平凡社 1955年  
 P836-837

- 55 山形県教育委員会「祭り・行事」民俗調査記録票 2004年  
 56 同 上  
 57 同 上  
 58 『日本の民俗 福島』第一法規出版 1973年 P 267  
 59 鈴木棠三『日本年中行事辞典』角川書店 1977年 P 669-670  
 60 柳田國男監修『改訂総合日本民俗語彙』第4巻 民俗学研究所 平凡社 1956年  
 P 1577  
 61 鈴木棠三『日本年中行事辞典』角川書店 1977年 P 669-670  
 62 柳田國男監修『改訂総合日本民俗語彙』第4巻 民俗学研究所 平凡社 1956年  
 P 1577  
 63 『日本の民俗 新潟』第一法規出版 1972年 P 256  
 64 同 上 P 256  
 65 『日本の民俗』第一法規出版 1971年～1974年 全47巻  
 66 『日本民俗地図Ⅱ』文化庁編 年中行事2 1971年  
 67 田中宣一「第1章 年中行事の構造」『日本民俗文化体系9 暦と祭事』小学館  
 1984年 P 78-81  
 68 岸本誠司氏談 2021年7月7日  
 69 『山形県民俗地図』山形県文化財保護協会 1980年 P 146-147  
 70 菅江真澄「かすむこまがた」『菅江真澄全集』第1巻 未来社 1971年 P 332  
 71 『東北の歳時習俗』明玄書房 1975年 P 32  
 72 和歌森太郎『津軽』吉川弘文館 1970年 P 245  
 73 秋田県文化財調査報告書第7集『秋田県の民俗』秋田県教育委員会 1966年 P 110  
 74 須藤功『写真ものがたり 昭和のくらし1 農村』社団法人 農山漁村文化協会  
 2004年 P 103  
 75 『東北の歳時習俗』明玄書房 1975年 P 94  
 76 文化財調査報告第10集『岩手の田植習俗』岩手県教育委員会 1963年 P 62-63  
 77 『金ヶ崎町史』岩手県金ヶ崎町 2006年 P 443  
 78 『祭礼と年中行事』仙台市歴史民俗資料館 2003年 P 85  
 79 『東北の歳時習俗』明玄書房 1975年 P 148-149  
 80 山形県教育委員会「祭り・行事」民俗調査記録票 2004年  
 81 同 上  
 82 渡部昇龍『尾花沢の信仰と民俗』私家版 1988年 P 7  
 83 『東北の歳時習俗』明玄書房 1975年 P 246  
 84 同 上 P 246  
 85 山形県教育委員会「祭り・行事」民俗調査記録票 2004年  
 86 同 上  
 87 『山形県民俗地図』山形県文化財保護協会 1980年 P 118-119  
 88 『東北の歳時習俗』明玄書房 1975年 P 298-299  
 89 『会津の年中行事』会津若松市史23 民俗編 会津若松市 P 11  
 90 諸富 大・遠藤匡俊「北上川舟運による盛岡藩の江戸廻米輸送」『歴史地理学』第  
 40巻 1998年 P 1-18  
 91 菊池勇夫『飢饉』集英社新書 2000年 P 112-113・P 119

- 92 岸本誠司「東北農耕文化とマメー岩手県北地方を中心として一」『民俗文化』第11号 近畿大学民俗学研究所 1999年 P175
- 93 『近世の北上川水運』東北歴史資料館 1982年 P42
- 94 『秋田県の歴史』山川出版社 2010年 P96
- 95 横山昭男『最上川舟運と山形文化』東北出版企画 2006年 P136-137
- 96 『山形県史』第2巻 近世編上 山形県 1985年 P773-774
- 97 佐瀬与次右衛門『会津農書』「会津農書・解題」(『日本農書全集』第19巻) 農山漁村文化協会 1982年 P257・P261
- 98 『今と昔ながとろ』長瀬郷土史研究会編 1989年 P221-222
- 99 『山形県農業基礎統計—基礎資料編Ⅱ—』山形県農林部農政課「5 農作物」1970年(昭和45)
- 100 前川和美『ものと人間の文化史174 豆』法政大学出版局 2015年 P86
- 101 『畑作付方式の分布と動向—東北6県及び新潟県における—』農業技術協会 1958年 P36
- 102 『日本の大豆』地球社 監修 農林省農蚕園芸局畑作振興課・食品流通局食品油脂課 1977年 P4
- 103 前掲 岸本誠司「東北農耕文化とマメー岩手県北地方を中心として一」 P190
- 104 名和季蔵『東郷村史』私家版 1954年 P241
- 105 早坂昇『高崎村誌』高崎村誌編集委員会 1958年 P187
- 106 『日本の神々 多彩な民俗神たち』新紀元社 1998年 P18-23
- 107 『祭礼と年中行事』仙台市歴史民俗資料館 2003年 P103
- 108 菊地和博「オコナイサマとオシラサマ」『研究紀要』第2号 東北芸術工科大学 東北文化研究センター 2003年 P161-188
- 109 『日本の心を伝える年中行事事典』岩崎書店 2013年 P169、および『日本民俗大辞典』吉川弘文館 1999年 P8
- 110 菊地和博「東北地方の大黒さま行事・習俗を考える」『村山民俗』第32号 村山民俗学会 2018年 P26
- 111 坂本要「仏教と年中行事」『日本民俗文化体系9 暦と祭事』小学館 1984年 P276
- 112 山形県最上郡大蔵村合海地区・松田与市家 2019年12月9日実施
- 113 『ひがしねの祭り・行事』生涯学習東根地区民会議・東根の歴史と民俗を語る会 2013年 P287
- 114 阿部襄『庄内の四季』農山漁村文化協会 1979年 P184
- 115 岩井宏實『暮らしのなかの神さん仏さん』慶友社 2012年 P50
- 116 『山形県大百科事典』山形放送株式会社 1983年 P892-893
- 117 奥村幸雄『小国の民俗風土記』(財)農村文化研究所 1982年 P37-38
- 118 加藤友康・高埜利彦・長沢利明・山田邦明編『年中行事大辞典』吉川弘文館 2009年 P239
- 119 『日本民俗大辞典 上』吉川弘文館 1999年 P239 P473-474
- 120 『日本石仏事典』庚申懇話会 1980年 P206-209
- 121 加藤和徳「山形県内陸の甲子(大黒天)信仰」『日本の石仏』123号 日本石仏協会 2007年 P36-42



- 122 加藤和徳「石造文化財編」『長井市史』各論第1巻 長井市 2020年 P 377-465
- 123 大友義助『新庄の石佛』新庄市教育委員会 1974年 P 124
- 124 清野春樹『田沢郷土誌』田沢郷土誌編集委員会 2021年 P 724-750
- 125 『長井市史』第4巻 風土文化民俗編 長井市 1985年 P 567
- 126 「奥州秋田風俗問状答」中山太郎編『校註諸国風俗問状答』東洋堂 1942年 P 115-116
- 「出羽国秋田領風俗問状答」（『日本庶民生活史料集成』第9巻 風俗 三一書房 1969年）には「秋田城下之部」および「秋田六郡神佛之部」のタイトルはなく「六郡祭事記」のみである。
- 大黒祭りが「秋田城下之部」に記載されていることの重要性を考えて、本稿では中山太郎編『校註諸国風俗問状答』の「奥州秋田風俗問状答」を引用した。
- 127 前掲『総合日本語彙』P 837
- 128 山口弥一郎「東北と食習」『山口弥一郎選集』第7巻 日本の固有生活を求めて 世界文庫 1973年 P 410